

「愛」という権力 — 「やおい」を求める女性の欲望 —

0 5 s g 1 1 5 1 田中 望

目次

序章 女性は今、何を欲望するのか

第一節 桃色の社会	1
第二節 論文の目的と構成	2
第二節 「やおい」というサブカルチャーの誕生	3
第三節 「女子文化」としての「やおい」	5

第一章 「やおい」を求める女性の欲望

第一節 なぜ「男性同士の恋愛」なのか	7
第二節 性の二重基準を負う女性	7
第三節 恋愛の制度化・「愛」による女の階級	9
第四節 「究極の＜対＞」を求めて	10
第五節 「対等な関係性」を求めて	11

第二章 「やおい」はジェンダーバイアスの強化・再生産か

第一節 「やおい」を構成する要素	14
第二節 「受」と「攻」の外見差が大きく描かれがちな作家	15
第三節 「攻」と「受」との外見差が小さく描かれがちな作家	18
第四節 快楽の遊び	22

第三章 「純愛」とセックスの強固な結びつき

第一節 女性のためのエロス表現	24
第二節 「攻」の快楽の描写	25
第三節 「愛」のあるセックス	28
第四節 パターン化されることへの問題	33

第四章 腐女子の中にあるホモフォビア

第一節 女性の「まなざし返し」は許されるのか・・・・・・・・・・ 35

第二節 「ゲイではない」という表明をめぐって・・・・・・・・・・ 39

第三節 「女」のわたしではなく「わたし」を愛して・・・・・・・・ 42

終章 「受」と「攻」との関係性を超えて・・・・・・・・・・ 46

あとがき・・・・・・・・・・ 49

参考文献・・・・・・・・・・ 52

序章 女性は今、何を欲望するのか

第一節 桃色の社会

世の中どこもかしこも桃色だ。人は生まれてから死ぬまで「恋愛」と無縁ではない。誰もが、愛されたいと思っている。今や結婚も、恋愛感情を前提とするべきだという考えが定着している。もはや、「恋愛をしない・できない」ことは「不幸」であるとみなされてしまう。「恋愛」して結果的に不幸になることだってあるのに、それでも人は「恋愛」しようとする。いや、しなくてはならない。「恋愛」には社会的・制度的な側面がある。「恋愛できない」「恋人がいない」ということは、この社会では負のレッテルを貼られる。恋人がいる人のほうが「えらい!」「かっこいい!」とみなす考えは、思春期の少年少女だけに限らない。「恋愛できない」というだけで、社会不適応な人間であり、人格が劣っているとみなされてしまうことだってある。「恋愛」が人格をはかる一つの尺度になってしまった。人間の優劣を決める尺度に。「恋愛」できない、もしくは、恋愛の対象にならない（こちらのほうがより強烈だ）ということ、もはや生きている価値がない人間のように貶められる。その恐怖は、人々を孤独と不安に陥らせる。

こうした傾向は、いわゆるオタク／腐女子にも顕著であるように思う。今回行った女オタクや腐女子に対するアンケートやインタビューでも、「腐女子だけど彼氏いる」や「恋愛をがんばらない腐女子にはなりたくない」などの声が聞こえてきた。なぜ、わざわざそのような主張をする必要があるのだろうか。腐女子を含むオタクというものは、恋愛という制度からはずれた人間と見られがちである。また、本人自身もそう思っていることが多い。（「自分」がというよりも「オタク／腐女子」である「自分」がである。）しかし、この社会では「恋愛」からは逃げられない。特に、女性にとって「恋愛」の力は男性以上に強烈だ。この社会では、「女の幸せ＝恋愛、結婚」という図式がある。仕事をとおして、働くことで評価され、生きている価値を見出すという手段もあるはずなのに、それだけでは満たされない。社会は、「愛」を手に入れなければ女性は幸せになれないと思わせる。だから、「恋愛したい」「しなければ」、どうにかして「愛」を手に入れたい、といった欲望が生み出されるのだろう。

第二節 論文の目的と構成

そうした欲望の受け皿のひとつに、「やおい」があるのではないだろうか。男性同士の恋愛や性行為を主題とし、それを女性の作家が描き、女性の読者が消費するマンガや小説のジャンルがある。俗に、そのようなジャンルを「やおい」と呼び、1970年代以降に登場したという。この創出と現代までのプロセスについては、序章の第三節と四節に後述する。また、2000年頃から、まるで自らを嘲るように「やおい」を消費する女性のことを「腐女子」（ふじょし）と自称するようになった。近年、「腐女子」の街として、池袋の「乙女ロード」がマスコミにも注目されはじめている。

言うまでもないが、すべての女性が「やおい」を求めるわけでは決してなく、一部の女性たちによる消費である。しかし、私は今回女性の欲望の一形態として「やおい」を分析したいと思う。なぜなら、「やおい」で描かれるテーマは、ここにおいても恋愛だからである。女性が書き女性が消費するというのに、その内容において女性はまったく登場しないか、ほとんど脇役である。そのような「やおい」は女性のどのような欲望を描き出しているのか。「やおい」を分析することで、腐女子には限定できないような女性の欲望が浮かび上がってくるだろう。この論文では、もはや一つの市場として成り立っている腐女子文化とそれを生み出す背景について考察し、作品を分析することをして、「やおい」を求める女性の欲望を明らかにしていきたいと思う。

ただし、「やおい」は「恋愛」の代替であるという単純な理解はあさはかであろう。今回行ったアンケートやインタビューでも「彼氏いるけど、（やおいを）ガッツリ読みます」というような声が聞こえてきた。逆説を用いて主張する点もこの論文のテーマと重ねて非常に興味深かったが、現実を求める恋愛と「やおい」に求める恋愛が完全に異なると語った腐女子も多かった。現実の代理ではなく、「やおい」が欲望として独立して消費されているようにも思える。しかし、そうした欲望が現実と完全に引き離せるかということ、そうではないだろう。この論文では、その欲望をより具体的にしていきたいと思う。

論文の構成は、序章にて、この論文の目的とテーマ設定の理由、「やおい」や腐女子文化の現状やそのプロセスについて述べる。第一章では、今までのやおい論をふまえて、なぜ欲望の対象として「やおい」を選択したのか、について考察しまとめた。第二章以降は、作品分析をとおして見えてきた「やおい」を求める女性の欲望について述べる。第二章では、「やおい」において描かれるカップルの関係性を分析し、「やおい」はジェンダーバイ

アスの強化・再生産であるのか、という問いに答えていきたい。第三章では、「やおい」におけるセックスシーンの分析をとおして、「愛」とセックスが強固に結びついていることと、その問題について考察する。第四章では、作品におけるゲイの描かれ方に着目し、腐女子の中にあるホモフォビアについて、今までのやおい論をふまえて考察したものをまとめた。終章では、「やおい」のマンガとしての可能性について述べる。

また、今回この論文を書くにあたって、たくさんの腐女子の話を聞くことで視野を広げたいと思い、簡単なインタビューとアンケート調査を行った。2008 年の 8 月から 9 月にかけて、マンガやアニメ好きの 4 名の女性にインタビューをし、12 名にはアンケートに協力してもらった。（1 名はインタビューとアンケートの両方に協力してもらった。）友人や知り合いを頼りに協力者を募ったため、年齢や地域、嗜好に偏りは生じてしまったが、興味深い回答も多く、発見的な意味合いはあったと思う。随時紹介していきたい。便宜的にアルファベットの A から O をそれぞれの仮名として使用する。

次節では、現在の「やおい」誕生の過程についてまとめた。

第三節 「やおい」というサブカルチャーの誕生

「腐女子文化は、女子文化というサブカルにさらにサブカテゴリーである」[上野、2007：36] それでは、その「腐女子」の消費する「やおい」とはどのようにして誕生してきたのか。

現在、「やおい」というジャンルに分類されるマンガや小説は、発行元が個人ではなく、出版社である書籍（以下、本稿ではこれを「商業誌」と表記する）だけで、月に 150 点近くも出ているという。書店などにおいても、女性向けのマンガや小説の半数がこのジャンルなのではないか、と思わせるくらいの勢いである。扱っている内容が男性同士の恋愛や性行為であるため、従来の少女漫画やレディースコミックとは異なる「新ジャンル」としてのイメージが強いだろう。しかし、「やおい」とは、そのような女性向けの少女漫画やレディースコミックといった女子文化と無縁ではない。「やおい」が市場化してゆく過程を見てゆくとそれがよくわかる。

多くの論者が、「やおい」のルーツとして 1970 年代前半の「24 年組」と呼ばれる少女漫画家たちを挙げる。萩尾望都、竹宮恵子、大島弓子などがそれに当てはまる。「24 年組」がそれまでとは異なり特徴的だとされるのは、少年を「同性によって性愛の対象」とした

設定の物語である点であるという。そして、当時、そこでは「少女的」な特徴をもつ少年が描かれていたため「美少年もの」という名称で呼ばれていた[笠間、2001：228]。他にも、このジャンルを指す名称として、「少年愛」「お耽美」「ホモもの」「薔薇もの」という言葉が使われていたという[ヤマダ、2007：125]。作品としては、萩尾望都の『トーマの心臓』[1974]や竹宮恵子の『風と木の詩』[1976]などが挙げられる。

そして、「やおい」という言葉が使われ始めるのは、1970年代半ばからで、女性読者自ら、「新しい遊び」として男性同士の恋愛や性行為をテーマとしたマンガや小説を創り出してゆく。それを後押しする存在として、1975年に同人即売会である「コミックマーケット」が初めて開催された。そこでは主に、既存のテレビアニメやマンガ、ドラマを男性同士の恋愛物語に読み替えたパロディが描かれた。そこで、それを作成する当事者たちの間で自らの作品を「ヤマなし、オチなし、イミなし」と自虐し、略して「やおい」と呼び始め、1980年代に入ると「やおい」は同人即売会の主要な勢力になったという[笠間、2001：229]。

1980年代後半になると、『JUNE』など商業雑誌において「やおい」を扱う雑誌が登場し、単行本化されてゆく。商業雑誌である『JUNE』だが、掲載される小説やマンガは読者の投稿によるもので、「同人というアマチュアの書き手と商業雑誌の書き手との敷居は限りなく低かった」という[笠間、2001：229]。そして、1990年代に入ると「やおい」を扱う商業誌が次々と創刊され、あおり文句として「ボーイズラブ」という言葉が登場してくる[ヤマダ、2007：123]。略して、「BL（ビーエル）」という言葉が使われている。2007年の11月号の『ダ・ヴィンチ』では「みないで！ボーイズラブ大特集」という特集が組まれていた。また、2007年12月臨時増刊号の『ユリイカ』においても「BLスタディーズ」という総特集がされた。このように、現代において男性同士の恋愛物語を扱うジャンルは、「ボーイズラブ」という言葉が使われているようだ。ところが、「やおい」という呼称も廃れたわけではないようで、多くの論者たちはそれらを「やおい」と呼び、「やおい」を論じることを「やおい論」と呼んでいる[金田、2007：48]。ライターである渡辺由美子は、仮の定義として、アニメや少年漫画・青年漫画のパロディを「やおい」とし、女性向けに描かれたオリジナル作品を「ボーイズラブ」とすると述べた[渡辺、2007：69]。

そこで、広義の「やおい」を男性同士の恋愛物語を扱うもの、狭義の「やおい」を既存のアニメやマンガ、ゲームなどのパロディとして男性同士の恋愛に読み替えるもの、と捉えるのが妥当だろう。しかし、広義／狭義の「やおい」、「ボーイズラブ」などのジャンルの呼称を、作家や読者は、厳密に分類し区別し用いているといった印象はあまりない。な

お、今回私は、男性同士の恋愛物語を扱う小説やマンガをまとめて「やおい」と呼ぶことにする。第二章以降の作品分析においては、商業誌であるコミックを分析対象にしたため「BL」という言葉のほうがぴったり当てはまるように思えるが、混乱を避けるために「やおい」で統一した。

第四節 女子文化としての「やおい」

先に述べたように、「やおい」はルーツとされる少女漫画と地続きである。絵柄や構成も少女漫画的であるものが多い。男性向けと女性向けの絵柄についてだが、近年はあまり差異がないのでは、と私は実感している。例えば、1980年代から連載された『キャプテン翼』が女性の読者層を獲得したように、現在でも『少年ジャンプ』を愛読する女性が多い。現在『少年ジャンプ』で連載されているマンガのほとんどが、いわゆる「女性ウケ」の良さそうな絵柄が多く、『北斗の拳』や『ドラゴンボール』のような線の太くて力強そうな絵柄はほとんど見ない。また、アニメグッズ販売店のアニメイトの『少年ジャンプ』系のグッズを購入する人のほとんどが女性だという。そして、同人誌即売会においても『少年ジャンプ』系のマンガをパロディにした「やおい」の人気は強く、ひとつのジャンルを確立している。ここで、「やおい」は少年漫画とも地続きであるのか、男子文化の一部であるのか、という疑問が浮き上がってくる。しかし、それに対して私の考えは完全に NO である。確かに、少年漫画を題材にしてパロディを描くのだから、全く関連がないとはいいきれない。しかし、「やおい」は女性によって書かれ、女性によって消費される。しかも、「やおい」において描かれるのは男性同士の「恋愛」が主題であり、少年漫画に特徴的な「戦闘もの」「スポーツもの」というテーマだけを描き出す「やおい」作品はない。そもそも、男性同士の恋愛を描くから「やおい」なのであり、この「恋愛」的な要素が無ければたとえ男性しか登場しなくても「やおい」には分類されないであろう。こうしたことから、「やおい」は女子文化として成り立っていると捉えるべきであろう。

近年、「やおい」を読む男性、いわゆる「腐男子」の存在も明らかになってきた。しかし、圧倒的に「やおい」を作り出し消費するのは女性であることから、性別隔離文化であるといえよう。こうしたことから、このような男女の非対称性を「やおい」をジェンダー論的な視点で分析することに意味があると思う。なぜ、女性である「腐女子」は欲望の対象として「男性同士の恋愛」を選択したのか。女性にとって「やおい」とは何なのか。次章で

は、これらの疑問について考察してゆく。

第一章 「やおい」を求める女性の欲望

第一節 なぜ「男性同士の恋愛」なのか

なぜ、腐女子は自らの性である「女性」をファンタジーから排除したのであろうか。なぜ、男性同士でなければならなかったのか。これは、「やおい」を分析する上で、避けられない問いであろう。これに対する答えとして、やおい論の草分け的な存在の中島梓は、「選別される性」としての女性性からの逃避だと述べた。そして、自己同一化せざるを得ない女性を排除し、代わりに同一化する存在として女性ではないものを設定し、それが結果として「男同士の恋愛」だったという〔中島、1991〕。ここにおいて、「女性ではないもの」を表象するためには「男性」しかない。男女の二元論で構成されているこの社会ではそうするしかなかったのであろう。そして、この中島の説をよりコンパクトにより深くまとめたものとして、金田淳子の「やおいにおいて回避されているのは、性や女性らしさではなく、女性を性的対象としてみる（性的対象としてしかみない）まなざしではないだろうか」という議論がある。「女性は、やおいにおいてはまなざされる客体ではなく、まなざす主体となり、自らの性的欲望を語る主体となるのだ」という〔金田、2007：177〕。私も基本的にはこれと同じ立場をとる。

では、そうした「社会のまなざし」や「選別される性」とは何なのか。

第二節 性の二重基準を負う女性

「まなざしにさらされる自分たちの存在そのものの存在しなくなる場所、として無意識に選んだ場所」それが、「やおい」だった〔中島、1991：191〕。その「まなざし」について考えてみたい。

この場合の「まなざし」とは、女性が常にセクシャルな視線にさらされているということを目指すだろう。では、なぜ女性がそのような対象になったのか。それを考える上で、「性の二重基準」という概念が重要となってくるだろう。かつて、家制度と公娼制度が存在していた時代、「男に都合よく造られた世界の中で、女が家庭用とセックス用に使い分けられて」いた〔加藤、1996：166〕。つまり、女性は「性欲処理」の対象か、「愛」の対象かという、二重の性道徳により分断されていたのである。注目すべきは、こうした二分法が、

現代において境界があいまいになってきている、ということにある。では、こうした女性を二分する性の二重基準は現代において意味を持たなくなったのか。

だがそのことが意味するのは、「家婦」と「娼婦」という二分法が無効になったのではなく、まったく反対に、誰もが（少なくとも潜在的には）「家婦」であると同時に「娼婦」でもあるというように、女性たちがつねに二重の負担を強いられるようになったということではないか。今や性の二重基準は、女たちを二つの領域に割り振るのではなく、むしろすべての女たちに二重の役割を押し付けるというやり方で機能しているのではないか。[加藤、1996 : 168]

このように、性の二重基準はすべての女性に二つの役割を負担させるという形で存在し続けている。これは何を意味するのだろうか。例えば、『主婦』たちにとっては、どれほど母親として、妻として完璧であっても『女として』魅力的でなければ家庭を維持できない、という強迫観念が覆いかぶさってきた」[加藤、1996 : 171] ということがある。つまり、「主婦」であっても何でも、女性は男のセクシャルな視線にさらされるようになったということである。すべての女性に二重の役割が負わされた今、女性は「選別される性」となる。「愛されるために」、「愛」の対象となるためには、選ばれなければならない。この選別する「まなざし」からは逃げられない。「美人」で「かわいい」女でなければ選ばれない。つまり、「愛」の対象になれない。これに関連して、レディースコミックの分析において、藤本由香里はこう述べている。

自分が＜対＞の相手にまで選ばれるかどうかという、相手の胸三寸で決まることで、同じ行為が、それまで積み重ねてきた歳月が、ゼロになる、あるいは『いいように遊ばれた女』というマイナスまでついてくる、そんな脅威に、女性たちは常に直面している。なんとかして＜対＞関係を獲得しなくては、女たちは存在証明を得られないし、最終的には救われないのだ。[藤本、1999 : 91]

この文は私にとってかなり衝撃的であった。女は男の「愛」によってしか存在証明を得られないのか。なぜ、存在証明のために男が必要なのか、と絶望感でいっぱいになった。いや、それ以上に「＜対＞の関係を獲得しなければ」というような、「愛」という絶対的な

権力の存在に驚かされた。

次に、こうした性の二重基準がすべての女性に負わされた経緯について述べる。

第三節 恋愛の制度化・「愛」による女の階級

すべての女性に二重の役割が押し付けられた理由として、「恋愛」の存在は大きい。第二次大戦後恋愛結婚は増加し、高度経済成長期を境に恋愛結婚は見合い結婚の比率を上回り、近年では9割近くが恋愛結婚である〔加藤、石田、海老原、2005：60〕。「恋愛」は、性のあり方を変えてきた。

家制度と公娼制度が（少なくとも法制度上は）過去のものとなり、＜恋愛結婚イデオロギー＞が社会の隅々に浸透してくるに従って、家庭は単なる再生産の場ではなくセクシャリティをも不可避的に抱え込んだ空間へと変容し、「主婦」と「娼婦」との境界は急速に薄められてきた。1人の女性が二重の役割を同時に引き受け、あるいはライフコース上に配分することを要求されるような、新たな状況が現出してきたのである。〔加藤、1996：171〕

このように、恋愛結婚が社会に浸透していったことが、二つの性道徳をひとりの女性に負わせることにつながった。そして、「主婦」と「娼婦」の境界はあいまいになったものの、「愛」の対象か、あるいは「性欲処理」だけの対象かという、ふたつの引き裂かれたイメージは温存されたまま、ひとりの女性に負わされた。そこにおいて女性は、「愛」の対象となるために苦悩することになる。今度は、「愛」が女を分断することになったのである。それについて、藤本は結婚が非制度化し、恋愛が制度化してきたという文脈でこう述べていた。

たしかに制度的な「結婚」の価値は下落した。しかし、ほんとうのところ今でも＜愛＞は、「結婚」かそれに順ずる結びつきを示さなければ、実際には証明されないものである。そして自分の側には愛情がありながら相手の＜愛＞が証明されない性行為は、多くの女性を不安に陥れる（経済的には自立しているはずの女性たちをもなお結婚に駆り立てた心理的な強制力はここにあるとわたしは見ている）。〔藤本、1999：61〕

「結婚できない」あるいは「結婚しない」というような、「結婚」という制度にのらないことは、以前よりもマイナスのイメージは薄れてきたように思う。それよりも、「恋愛」という制度から除外されてしまうことが、かなりのマイナスの評価を受けるようになったからではないだろうか。藤本は、『『愛されること』は、女にとって階級なのだ』という。つまり、「愛」の対象となる「選ばれる女」という階級の下に、「愛」の対象にならない「選ばれない女」という階級があるという。私は、それに加えて、「愛」の対象にも「性欲処理」の対象にすらならないという、「選別」の対象にすらなれない女性の階級があると思う。そして、そのことは女性にとってかなりの恐怖につながるだろう。

制度化した「恋愛」によって、女性たちの中にはどうしても、＜対＞の相手として「選ばれたい」という欲望がうまれてくる。なぜなら、「選ばれない」わけにはいかないのである。「それは女性の人生において最大の負のレッテルにほかならないのであり、その強迫は、女性にとって想像以上に根深い」〔藤本、1996：92〕のだ。こうして、制度化した「恋愛」が女性を＜対幻想＞にしがみつかせているのである。

第四節 「究極の＜対＞」を求めて

そこで女性がファンタジーとして欲望したのが「やおい」であった。そこでは、「選別する」社会のまなざしから逃れることができる。自らの性である女性を物語から排除し、男性同士の恋愛を描き出すことで、女性ではなく男性に自己同一化するという形で、それを成し遂げた。「やおい」において、社会の「まなざし」から回避することにより、彼女たちは、ファンタジーとして「恋愛」を愉しむことができたのである。＜対＞を獲得し、「愛される」ためには、女性という性を見る社会の「まなざし」が邪魔をする。それでも、＜対＞を求め、「愛」を求めた女性は、そうした「まなざし」の存在しなくなる場所として、「やおい」を求めたのだ。『ダ・ヴィンチ』のBL特集において、読者アンケート企画があり、「BL好きでよかったこと」に対して、37歳の医療関係の女性は、「男女の恋愛だと自分に置き換えてしまうのですが、BLは客観的に楽しめます」と答えていた。この「客観的に」という言葉は、「男性同士の恋愛」であるため「現実の性と直接関連がない」ということを意味しているのだろう。そのため、自らの「女性」という身体を介さないで恋愛ファンタジーを楽しむことができるのだ。しかし、第四章において詳しく述べるが、この姿勢

は「やおい」が抱える表象暴力という問題につながってゆく。

ところで、「やおい」において、「カップリング」というものがある。これは「やおい」を分析する上で重要なコードであるといえるだろう。「やおい」の描き出す「男同士の恋愛」は、多くの場合が一組のカップルである。設定やストーリーが多様化しているといわれる近年でさえ、ほとんどの「やおい」的な作品は、男同士のふたりをめぐる恋愛を描いている。とどのつまり、＜対＞を描く物語なのだ。この「カップリング」に対し、金田は、「カップリングはしばしば『究極の対』という絶対不可侵のものとして描かれるため、やおいにおいてはその組み合わせが最重要の解釈コードとなる」[金田、2007：174]と述べた。

たとえば、アニメなどのパロディにおける「やおい」では好みのキャラクター同士を「カップリング」して組み合わせを作り出した上で、恋愛や性行為を描き出す。また、商業誌やオリジナルの「BL」作品では、しばしば「具体的な解釈コードだけが独立することもある」[金田、2007：175]という。たとえば、「年下攻」や「ヘタレ攻」、「誘い受」などといったように、「キャラクターの関係性」を表すものが多い。ちなみに、「攻／受」について、『ダ・ヴィンチ』の特集では、「攻」は、「男性同性愛を扱った作品において、肉体関係をもつ際に挿入する側のこと。肉体関係がなくても挿入しそうな側のこと」、「受」は、「男性同性愛を扱った作品において、肉体関係をもつ際に挿入される側のこと。肉体関係がなくても挿入されそうな側のこと」[ダ・ヴィンチ 2007、11月号]という説明がされていた。この「受」と「攻」の関係性やその描かれ方については、第二章で詳しく述べる。

いずれにしても、こうした「カップリング」や「キャラクターの関係性」において描かれるものは、＜対＞の関係である。このように、社会の「まなざし」から逃れたいという欲望の一方で、＜対幻想＞にはしがみつかずにはいられない。それをもたらした、「恋愛」という制度の存在は大きい。そして、むしろ疎ましくすら思えてくる「愛」のもつ力にも改めて驚かされた。

第五節 「対等な関係性」を求めて

ここまで、なぜ女性は「やおい」を求めたのか、について考えてきた。ところで、「やおい」を嗜む女性、いわゆる「腐女子」たちが、こうしたことを必ずしも意識しながら「やおい」を消費しているかというと、そうではないだろう。単に「無意識」にたどりついたのが「やおい」だったのだろう。だからこそ、彼女たちの口から語られる言葉には興味が

湧く。

2007年11月16日に行われた石田仁先生の社会学特講の講義で、学外から来ている「やおい」好きの女性たちの話を聞くことができた。そこでは、30代くらいの女性の数名が自身と「やおい」の関係について語った。その語りの中で、私が気にかかったのは、「やおい」は「対等だからイイ」という言葉である。これは、「やおい」において描かれる恋愛にはジェンダーによる権力関係がないから、女性にとって快樂となるということだろう。このような「やおい」の捉え方は、「やおい論」においても議論されてきた〔上野：1998、藤本：1998など〕。当時、私は、「やおい」において描かれる恋愛の関係性が「対等」である、ということが実感できなかったのである。また、現実における同性同士の恋愛というのも、「対等」とは限らないのではないかと考えていた。経済的、地位的なものなどから対等な関係を崩すものはいくらでもあると思っていたからである。しかし、ジェンダーがつくり出す権力関係というものは、私が思っていた以上に強烈であったのである。私の「腐女子は、同性同士であることに、対等であるという幻想を抱きすぎではないか」という意見に対して、その講義に参加した中のひとりの女性が答えてくれた。

「やおい」とは、分母を揃えてくれるものと考えています。「男／女」という関係が分母にある以上、分子(経済的、地位的なもの)がどんなに大きくても権力関係を崩すことは難しい。だけど、分母を「男／男」に揃えることで「対等」なスタートを切ることができるんです。〔39歳、女性〕

私より長く生きてきて社会人経験を長く積んだ女性であるために、彼女の言葉は私の心に重く響いた。ポイントは「対等なスタートを切れる」というところにある。スタートさえ「対等」であれば、後に恋愛の結果としてできあがる権力関係というものは、あまり気にしないのだ。たとえば、アニメやマンガを「読み替え」てパロディ化する「やおい」において、原作では対等であろうとしている2人に、あえて上下をつけて力関係を楽しむことが多いという〔渡辺、2007：73〕。具体的には、週刊少年ジャンプで連載されていた『DEATH NOTE』におけるLと月はライバル関係であり、力関係に大きな差はない。そこに「やおい」は、「実は甘えん坊」などの設定を加えることによって上下を作り出すのだ。こうした作品においては、「対等」な関係をわざわざくずして、恋愛における力関係を楽しんでいるように思える。だから、本質的には、「腐女子」は「対等な恋愛」自体を求めている

るのではなく、「対等」の可能性のない男女関係を排除したのだ。

このように、やおい論において、「対等だからイイ」という言葉に象徴されるように、男性優位な社会で、女性が求めえない対等な関係性への欲求であると説明される。そして、しばしば「対等な関係性がやおいの特徴」とされることが多いが、実際は、対等な関係性の中に権力関係を持ち込む「遊び」、こそが「やおい」の特徴といえよう。「対等な関係性」を描くのが「やおい」なのではない。繰り返しになるが、「対等」の可能性のない男女関係という関係性を排除したのが「やおい」である。しかし、実際、ほとんどの読者はそれらのことを意識していないだろう。今回のアンケートやインタビューで『『やおい』のどのような点が好きですか』という問いに対して返ってきた回答では、「対等だからイイ」という答えは思った以上に少なかった。関係性の「対等さ」に比重を置く人はほとんどいなかった。そもそも、なぜ自分が「やおい」を好きになったのか、なぜ好きなのか、考えたこともない人ばかりだったのである。そうした中でも、なかなか興味深い回答があった。たとえば、「男だけの世界って楽しそ」[21 歳、大学生、B]、「男子の群れをずっとながめていたい」[21 歳、契約社員、E]など、男性同士のライバル関係や親友関係などに憧れを抱くという意見だ。また、「同性(女性)のネチネチした部分に触れた時に嫌悪感あり」[21 歳、大学生、N]、「男の子はケンカしてもすぐに仲直りできるからいいな」「男同士の親友関係は聖域」[21 歳、大学生、M]などの回答もあった。美化された男同士の関係は腐女子の幻想かもしれないが、「男同士」に憧れる一つの理由であり、女性同士の人間関係に否定的に語る人も多かった。単に「男」というジェンダーに憧れるのではなく、その男性同士の空間に憧れるのだろう。腐女子の欲望の対象は「関係性」である。もちろん、個々の登場人物のキャラクター性や身体美に魅力を感じることも当然のことながらあるだろうが、「やおい」において、この「関係性」は読者にとって重要な欲望の対象であろう。

これまで、「やおい」を求める女性の背後にあるものを探ってきた。「やおい」は、それを嗜好する女性の、社会のジェンダー秩序に違和感を抱き距離を置きたいという欲望の表れである、と捉えることができるだろう。ここまでは、「やおい」を社会との関係で見えてきたが、ここからは個々の作品をとおして何が描かれており、それは何を意味しているのか、を考察してゆく。次の第二章から第四章は、作品の分析をとおして、より具体的に「やおい」を求める欲望について述べる。

第二章 「やおい」の描く関係性はジェンダーバイアスの強化・再生産か

第一節 「やおい」を構成する要素

第一章の第四節において少し触れたが、「やおい」を構成する上で重要な要素がある。それは、「受」と「攻」の組み合わせによる「カップリング」である。縮めて「カプ」と呼ぶことも多い。このカップリングというコードは、狭義の「やおい」、つまり既存のアニメやマンガなどのパロディとして男性同士の恋愛に読み替える二次創作において、特に重要視されている。同人誌即売会などでは、「×」という記号を用いて、「×」よりも前が「攻」、後が「受」と表記することもある。たとえば、A というキャラクターが「攻」であり、B というキャラクターが「受」であるならば、「A×B」というように表す。このように、キャラクターをカップル化させることを「カップリング」と呼ぶ。また、単に「カップル」という語に変換可能である場合にも使うことが多い。たとえば、「好きなカップリングは何?」「年下攻め（年下のキャラクターが『攻』になること）のカップリングが好き!」というように使われる。この場合、腐女子の間ではほとんど「カップル」という語は使われない。二人の組み合わせであるのだから「カップル」と呼んでもよさそうであるが、なぜ「カップリング」という言葉を使うのだろうか。これは、おそらく「受」と「攻」に基づく組み合わせこそが「カップリング」であり、それを強調するために「カップル」という言葉は使わないのではないだろうか。日常的に使う「カップル」という言葉とは距離を置き、「カップリング」という言葉を使うことで創作性、ファンタジー性が伝わるように思う。また、日本語で日常的に使う「カップル」という言葉には「付き合っている二人」という意味が込められことが多いだろう。「やおい」の場合は、恋愛の過程を描くものが多いため、「カップル」という言葉を使うよりも「カップリング」という言葉を使ったほうが、「後に恋仲になるだろう二人」という意味合いも同時に包括でき違和感なく使えるのであろう。

今回、分析の対象に選択したのは商業誌であり、二次創作の「やおい」ほど顕著に「カップリング」が記号として表記されることはさほど多くないが、それでもやはり、どのような「カップリング」であるかは、読む側も書く側もかなり重要視しているだろう。もはや、「カップリング」という言葉は、関係性を示す言葉でもある。そして、その関係性は欲望の対象になる。どのような「カップリング」なのか、つまり、どのような「受」と「攻」の関係性を描く物語なのか、がある作品を消費する上で重要なポイントになっていることは間違いないだろう。

そこで、この章では「受」と「攻」との関係性に注目して分析してゆく。第一章の第四節でふれたが、「攻」は性行為の際において挿入する側のこと、「受」は挿入される側のことである。また、ストーリー上、セックスシーンがない場合でも、視覚的に女性らしい可愛らしさを持った容姿のキャラクターや恋愛において受身であるキャラクター、つまり、求愛される側が「受」になることが多い。このことなどからも、初期の「やおい論」では、「攻」と「受」の差異を「男性的」「女性的」というように捉え、異性愛中心主義的ではないかと議論するものが多かったという[金田、2006：169]。そこで、作品分析をとおして、「やおい」において描かれている「受」と「攻」との関係性が、異性愛中心主義に基づきジェンダー役割を再生産、もしくは強化しているに過ぎないのか、否かについて考えてゆく。

分析軸には、金田淳子の提示した、「受」と「攻」の外見差の差異と「二者関係か三者関係か」という軸を利用した[金田、2006：169]。「やおい」もマンガであるため視覚的な分析には大きな意味があるだろう。今回は分析対象にマンガを選択したが、小説であっても「やおい」においては、「受」と「攻」との外見差がわざわざ説明されることが多い。それだけ読者も視覚的なイメージも重要視しているのであろう。また、二者関係か三者関係か、については、金田は二者関係を「カップリングを中心に世界がまわり、他者はストーリーに沿って動く道具としてのみ描かれる、というやおいジャンルの方向性」とし、「天動説やおい」と名付けた。そして、「カップルが自分たちだけで閉じるのではなく他者とともに生活する、という方向性」を三者関係、「地動説やおい」と名付けた[金田、2006：172]。私もこの章で、この外見差が大きい小さいかという軸と、「天動説やおい」か「地動説やおい」かという軸を利用して分析を試みた。特に、ジェンダー役割についてどう描かれているか知りたかったため、外見差に注目した。

第二節 「受」と「攻」の外見差が大きく描かれがちな作家

まず、「受」と「攻」の外見差が大きく描かれがちな作家として星野リリィの作品をあげる。星野は、「受」を徹底的に女性的に可愛らしく、「攻」を徹底的に男らしくクールに描く。それが顕著にあらわれている作品として、『かわいがって下さい』[2003]を紹介する。人間のために作られた愛玩動物「ネコ」の話で、「ネコ」はご主人様とセックスをしないと死んでしまう。4匹（体？）の「ネコ」と主人の話が5話収録されている。南国の島国を

舞台にした「南の島」シリーズも同録されているが、今回は「ネコ」の話を分析対象にした。この作品は、ほぼカップリングの2人しか登場しないため、「天動説やおい」に分類されるだろう。

ある日、サラリーマン風の若い男(=「攻」)のもとに、姉から「ネコ」が送られてくる。「受」として描かれるこの「ネコ」は、まるで少女のような容姿だ。「攻」もその「ネコ」を「メス」と思い込んでいたようで、ペニスの存在ではじめて「オス」と認識する。男女に見えるほど、外見差は大きく描かれている。【図1】一方で、「ネコ」が「攻」で主人が「受」の設定もある。「攻」である「ネコ」は、男性的で性格もクールに描かれている。そして、今回の「ネコ」は「攻」であるため、抱く側になる。「受」は、さきほどの受であった「ネコ」と比べると、少女のようには見えないが、今回のカップリングの「攻」と比べると女性的に描かれている。【図2】



【図1】

星野リリィ『かわいがって下さい』
2003、海王社 p.8-9

サラリーマン風の男（攻）と、
愛玩動物ネコ（受）



【図2】

星野リリィ『かわいがって下さい』
2003、海王社 p.112-113

黒髪のネコ(攻)と、
ご主人様（受）



【図 3】

星野リリィ『かわいがって下さい』

2003、海王社 p.78-79

ご主人様（攻）と、
黒髪長髪のネコ（受）



【図 4】

星野リリィ『かわいがって下さい』

2003、海王社 p.126-127

医者風でメガネの（攻）と、
フワフワ髪の（受）

あとの2つの「ネコ」のパターンも確認してもらいたい。【図3】のネコは、「受」であり黒髪で長髪という女性性をもっており、表情も「攻」に比べると女性的である。しかし、体つきは「攻」よりは多少華奢であるが、ペニスも【図1】のネコに比べると、大きめにかかっている。裸体を見なければ、女性に見えるような中性的な「受」だ。【図4】では、ネコである「受」は、フワフワでブロンドの髪型で、目もパッチリ描かれていて、まるで少女のようである。性格はやんちゃな少年らしさを持ったキャラクターとなっている。対照的に、「攻」はクールな大人の男として描かれており、その体格差は一目瞭然である。

このように、星野の描く「受」と「攻」には一目でわかるほどの外見差がある。「受」は女性的で「攻」は男性的である。おもしろいのは、「ネコ」という設定によって女性的な「受」が積極的に「攻」である主人に愛情表現をし、セックスを求めるという点だ。主人を好きであるという気持ちを自ら全面的に押し出し、「抱いてください」と請う。「ネコ」が「攻」

の場合でも、「受」の主人がセックスしたいという気持ちを伝える。セックスシーンについてはいずれも「受」が完全に受動的に描かれているが、「受」が主体的に求愛し性欲を表現するという点については、ジェンダーの規範とは完全には重ならないだろう。なお、この作品のセックスシーンの描かれ方については、第三章において詳しく述べる。

第三節 「攻」と「受」との外見差が小さく描かれがちな作家

次に、「攻」と「受」との外見差を小さく描く作家として山田ユギの『誰にも愛されない』[2007]を分析する。大学を卒業し疎遠になっていた、編集者で働く営業が転職の熱血漢な飯島（＝「攻」）と、他人に興味がない古書店経営の日下（＝「受」）が再会し、翻訳という仕事を一緒にする話である。

この二人以外にも、日下の留学時代のルームメイトである長谷川、日下の古書店にやってくる客である上野、留学先のアパートのオーナー、作家で学生時代に上野と共同で作品を出していた原、など多様な人物が物語に絡んでくる。そして、この作品で特徴的なのが、「血の通った」女性が登場することだ。「やおい」的な作品において、女性はあて馬か邪魔役として扱われることが多い。しかし、山田の作品のでは、女性に「血が通っている」という[吉本、2007：177]。そうはいっても、「やおい」であるため、女性キャラは二人の関係により色取りを添えるための脇役でしかない。しかし、脇役でも一人の人間として、しっかりとした背景が描かれているため、そう評価されるのであろう。たとえば、今回の作品の場合、さつきという女性が登場する。さつきは、飯島と日下が再会する半年も前から、日下の店の二階に居候している。元彼がDV男で、行くあてもなくて古本屋に住み着いた。19歳でキャバクラのようなところで働いている。このさつきのエピソードだけでも一話描けるであろうと思えるぐらい、さつきという女性を丁寧に描いている。読者は、日下にも飯島にもさつきにも感情移入して物語を読むことができるのだ。このように、女性キャラクターをはじめ複数のキャラクターが物語に絡んで、恋愛だけでない人間ドラマも描くことから、この作品は「地動説やおい」と言えるだろう。

さて、外見差はどのように描かれているかというと、短髪でガタイのいい男性的な風貌の飯島に対して、日下はまつげが描かれていたり顔の輪郭が柔らかいなど女性的な部分も持っている。【図5】しかし、先ほどあげた星野リリィの作品と比べると外見差は小さいほうであろう。「攻」である飯島と比較すると女性的な要素を持っている「受」の日下である

が、裸体は筋肉質で女性と間違える人はいないだろう。【図6】



【図5】山田ユギ『誰にも愛されない』2007、リブレ出版、p.90-91

右下のコマの右が日下（受）で、
左が飯島（攻）



【図6】
山田ユギ『誰にも愛されない』
2007、リブレ出版、p.214-215

また、後に恋愛関係になる長谷川と上野に関しては、外見差はもっと小さい。彼らの体格にあまり差はない。多少、上野の方は輪郭が丸めで、髪型が少し長めな程度だ。【図7】色味がかった髪をしているのが上野で「受」である。この作家の他の作品を見ても、「受」であっても男らしく描かれている。キャラクターの性格についても、女性的であると感じる「受」はあまり見当たらなかった。ちなみに、「やおい」を全く読まない女性に、星野と山田の漫画を読んでもらったとき、星野は「受」を女の子として読めるけど、山田はどちらも「男」だから読めない、という感想があった。



【図7】

山田ユギ『誰にも愛されない』2007、
リブレ出版、p.260-261.

一番右のコマの、右が上野(受)で、
左が長谷川(攻)

次に、山田の作品では、カップルの関係性はどのように描かれているのだろうか。山田の作品では、ゲイであると自認しているキャラクターが多い。今回の作品では、日下と上野という「受」がゲイであると自認しており、どちらのカップルも「攻」は自身を異性愛者だと思っていたが男である「受」を好きになった、というパターンであった。その点で、「ゲイがノンケを誘惑するストーリー」と簡単にまとめることも可能かもしれない。しかし、双方の感情を丁寧に描くことで、その色は少し薄まっていると思う。もう少し詳しく見ていこう。

まず、日下と飯島の場合、後に日下の初恋は飯島であったということが明らかになるが、どちらかといえば、飯島が日下に惚れこんでおり、積極的に恋愛関係に持ち込みたいという欲望が見えるのは、自分を異性愛者だと自認している飯島のほうであった。また、日下が、二人の関係について飯島に「自分はゲイであるからいいが、先のことを考えて欲しい」と言ったのに対し、飯島は、「日下のことを女のように扱って、自分の庇護下に置くことで安心しようとしていたのかもしれない」と反省する。この点は象徴的で、腐女子が男同士の関係性に憧れる一つの理由であると言える。男女の関係性であれば、女性は守られる立場でなければならないという規範があるし、自分でそう思っていなくても、相手にそう扱われてしまうことがある。しかし、男同士の関係性であれば、それが取り外され「対等な関係性」を築けるように思えるのだ。

次に、上野と長谷川の場合を見てみよう。「受」である上野はゲイと自認している。それに対し、長谷川は自分について「ノーマル」ととらえている。【図8】しかし、長谷川の上野に対する気持ちがだんだんと明らかになってくる。後に、上野の「男とやるのにハマッ

たのかよ」という問いかけに対し、長谷川は「…まあ、上野さん限定ですけど」と答える。

【図9】山田の作品は、ゲイをゲイとして描くのではなく、ヘテロをヘテロとして描くのではなく、ひとりの人間として描く。セクシュアリティの境界の曖昧さというのが、キャラクターを通して伝わってくる。



【図8】
山田ユギ『誰にも愛されない』
2007、
リブレ出版
p.238-239



【図9】山田ユギ
『誰にも愛されない』
2007、リブレ出版、
p.300-301

第四節 快樂の遊び

金田淳子は、「やおいは、しばしば男性キャラクターに過度の『女らしさ』を読み込んだり、男性キャラクターどうしに誇張された『異性愛関係』を演じさせるが、これも『攪乱』としてみることができるだろう」[金田、2007：173]と述べていた。「やおい」において繰り返される異性愛の模倣とも見える関係性は、それを誇張することで、ジェンダーの秩序を再生産ではなく「攪乱」することが可能になる、という見方である。そのような可能性も「やおい」は持っているのかもしれない。

また、永久保陽子は、やおい小説を分析し、「受」と「攻」は男女役割を模倣しているようだが、それは組み合わせによって生まれる差異であり個性で、性差の抑圧からは自由であると指摘した[永久保、2005]。抑圧をあらかじめ排除して、「男らしさ」「女らしさ」を楽しむことが可能になったのだという。また、それを永久保は「ジェンダーの娯楽化」と指摘した。確かに、星野や山田の作品を見ても「受」と「攻」は単純な二項対立ではなく、

「男性的なもの」「女性的なもの」がそれぞれにちりばめられているように感じる。「受／攻」の関係性を表す語で、「誘い受（受のほうが積極的に性行為をせまること）」「俺様受（強気な受）」や「ヘタレ攻（気が弱く情けない攻）」「尽くし攻（受に尽くす攻）」など、様々なバリエーションがある。どの関係性がどれほど人気があるのかは測り知れないが、「受／攻」に完全にぴったりと「女性的／男性的」が割り当てられているかというと、そうではないだろう。やはり、永久保が「ジェンダーの娯楽化」と指摘するように、ジェンダーの要素を割り当てる「遊び」になっているのかもしれない。また、永久保は「＜受＞と＜攻＞は、それぞれのジェンダー的要素の権化として、きわめて単純な二項対立関係にあるようにみえる。しかし、＜受＞と＜攻＞のその実体は、ともに女性性と男性性の双方を備える『性的連続体』なのである」と述べた[永久保、2005：101-102]。この主張については、私は否定的である。特に、「性的連続体」という表現に不的確さを感じる。確かに、これまで見てきたように、「受／攻」に「女性的／男性的」が入り混じっていることはうなずける。

「攻」であっても容姿端麗な美人で女性性の記号を持っているキャラクターや、「受」であっても筋肉質だったりやんちゃな性格であるキャラクターもいる。ただ、「連続体」であろうか。「女性的／男性的」を表す記号をあてはめて組み合わせを楽しんでいるに過ぎないのではないだろうか。「連続体」というとグラデーションのようになだらかなイメージであるが、実際はもっとぶつ切りされた女性性・男性性を表す記号が鎖のようにつながれている

だけのように思える。

いずれにしても、「やおい」における「受／攻」の関係性は、単純な異性愛中心主義的な二項対立ではないということが分かった。社会学者の吉本たいまつは、最近の作品が多様になってきているとし、「女性たちはこれまでの、ジェンダーに依拠した役割に固定化されることを避けようとしている」と論じた[吉本、2007：140]。結果的に母であることや専業主婦になることを選ぶ女性もいるが、「それしか選択肢がない」という状況に陥りたくないという姿勢が表れているのだという。これは観察者の観点であり、どれだけ「やおい」を読む人が意識しているのかはわからないが、無意識であるにせよ、そのような欲望がありそうだ。そして、「やおい」は、「ジェンダーの娯楽化」という快楽の「遊び」を可能にしていることも明らかになった。ここまで、ジェンダーの抑圧からの「逃げ」というイメージで「やおい」を捉えていたが、「やおい」という装置によって積極的に快楽を見出すことが可能になったという、ポジティブな捉えかたもできるだろう。

しかし、「受／攻」に多様なバリエーションがあるといっても、やはり傾向として、男女役割がそれぞれの間である程度固定化されて、セックスにおける挿入する側かされる側かもそれと呼応している。「リバ（リバーシブル）」という「受／攻」がときどき入れ替わるカップリングも見られるが、それは全体からするとかなり少ない数だ。これについて、溝口彰子は「やおいがかなり保守的なノンケ女性の恋愛ファンタジーを表現するものであり、主人公がふたりとも男性的な男性という『同一性』のカップリングのままでは『異』性愛ファンタジーの代理人としては適さないからだ」[溝口、2000:200]と論じていた。腐女子は、ファンタジーから自らの性を排除したはずが、異性愛者の彼女たちのファンタジーを代理するものである以上、二者間に男女の区別のような異質性を必要としたのだろう。それは、「受／攻」の定義にも入り込んでいる「挿入」というセックスの表現が象徴的に表しているだろう。第三章では、「やおい」におけるセックスの描かれ方について述べる。

第三章 「純愛」とセックスの強固な結びつき

第一節 女性のためのエロス表現

「やおい」は、女性のためのエロマンガという側面もある。作品によって、セックスシーンをどう扱うかなどは異なり、商業誌では特に雑誌ごとに「どの程度まで描くか」について規範があるように思う。セックスシーンが全く描かれない「やおい」もあれば、恋愛というより性愛を描きセックスシーンに重きを置く「やおい」もある。作品が多様であれば、読者である腐女子の好みも多様であるが、「やおい」の性表現を語らずに「やおい」を語ることは不可能であろう。この章では、「やおい」におけるセックスシーンの描かれ方に注目し、その特徴を考察してゆく。

まず、多くの「やおい」的な作品のセックスシーンで、よりクローズアップされるのは、挿入シーンであろう。「受／攻」の定義にも、「挿入される側／する側」といった意味合いが入り込んでいる。これは、作者や読者が、男性同士のセックスはアナルセックスをするものだと思いこんでいるのと、異性愛のセックスでも挿入というのはかなり重要視されている、という二つの側面が表わされているだろう。しかし、男性向けエロマンガと比べると、挿入をしなければ終われない、挿入がなければエロではない、という傾向はそこまで濃くないと思う。第二章の第四節において先述したように、異性愛の代理のファンタジーである以上、異性愛中心主義的な社会でのいわゆる「普通のセックス」というものは「男性器の女性器への挿入」であるので、「やおい」のセックスシーンでも挿入が重要視されるのであろう。溝口は、「やおい宇宙において、＜受け＞キャラクターのアヌスは女性読者のヴァギナの代用品であって、男女ともにそなわっているアヌスという器官が表象されているわけではない」と指摘した[溝口、2000：200]。通称「やおい穴」というのだが、「受」の肛門からは、まるで女性器のようにセックスを円滑に行えるような分泌液が出てくることがある。このことから、自らの性はファンタジーから排除しても、自らの身体的な快楽を生み出すものの代わりをファンタジーの中に求めていることがわかる。この「やおい穴」について、三浦しをんとの対談の中で金田淳子は斎藤環の論を紹介し、「リアルな現実の肉体に準拠してないからこそすごく作品が豊饒になっている」と説明した[金田、三浦、2007：28]。男性エロマンガで、現実には不自然なほどの巨乳の女性が描かれるのと同様に、エロスへの想像力において性別は関係ない、と述べていた。確かに、そのとおりでそ

うあるべきだと思うが、「やおい」におけるエロスの表現はまだまだその想像力の幅が狭いように思える。男性向けのエロマンガに描かれるほどの無限なエロスの表現方法を、まだ女性は身につけられていないのではないだろうか。「やおい」はその役目を担っているのかもしれない。

また、男性向けエロマンガに詳しい永山薫も、「虚構を虚構として区別できるからこそ『萌え』られる」と述べていた[永山、2006：129]。確かに、そのとおりで腐女子の多くは、ファンタジーである、と現実と区別してそれぞれの好みの作品を愉しんでいるだろう。しかし、これは「現実のゲイとは関係ない」という姿勢を固く支えるものとなっている。この問題については、第四章の「腐女子のなかにあるホモフォビア」で詳しく述べることにする。

第二節 「攻」の快楽の描写



【図 10】克亜樹『ふたりエッチ』
32巻、2006、p.50-51

右下のコマ

男性の身体が描かれない

アンケートで「やおい」のセックスシーンのいいところは何か、という質問に対して「攻の感じている顔が見れるから」[20歳、千葉、K]という回答があった。「やおい」では、「受／攻」両方の快楽が表現される。多少「受」の快楽に偏りがちだが、「攻」の顔の描写もされる。男性向けエロマンガでは、主に女性の快楽が描かれ、男性は透明人間のように描かれるか、コマに入らないことが多い。男性が消える描写のひとつとして、克亜樹『ふたりエッチ』[32巻、2006]の一コマを見てほしい。【図 10】描かれている女性に挿入してい

るはずの男性の体が突然消える。「やおい」においては、挿入されている「受」だけのコマはあっても、コマからはみ出て描かれないだけであって、先ほどのように挿入している側つまり「攻」が透明人間化して描かれることはあまり見かけない。(p.16 【図2】参照) 女性向けのポルノグラフィに詳しい守如子によると、セックスシーンに重きを置く作品、いわゆる「ハードな BL」と呼ばれる作品ほど、「受」の身体に与えられた快楽をより強調したかたちで描写されるという[守、2007 : 79]。

では、「攻」の顔がどれくらい描かれているのだろうか。守は、1970年代からジャンルとして成立している「エロ劇画」、現在のポルノコミックの主流である「美少女コミック」と、「ハードな BL」を比較し「攻」と「受」のどちらの顔が多く描かれているかを分析した。そして、「受」の顔が圧倒的に多く書かれた作品の割合を出した[守、2007 : 79]。その結果を表に下に記した。

エロ劇画	美少女コミック	ハードな BL
71%	91%	23%
21 作中 15 作	32 作中 29 作	30 作中 7 作

この表においては、%数値が高いほど、作品内において挿入される側である「受」の顔が多く描かれ、挿入する側である「攻」の描写が少ないことを示している。見てわかるように、男性向けのエロマンガである「エロ劇画」と「美少女コミック」に比べると、「やおい」の中でも特にセックスシーンに重きを置く「ハードな BL」は、「攻」の顔の描写がされることが多い。では、この「攻」の顔の描写には、腐女子のどのような欲望が表れているのだろうか。

永山薫は、主に男性向けのエロマンガについてまとめられた本の中で、美少女エロ漫画を読む際に読者は、第三者として作品を見通す「窃視者の視点」と登場人物の視点にシミュレートする「自己投影の視点」といった二つの視点を、「読み」という行為で同時進行に行っている、と説明した[永山、2006 : 104]。腐女子もそのように「読み」という行為を行っているだろう。溝口は、「受」「攻」に自己投影するふたつのモードと、物語宇宙の外側に立つ読者としての視点というモードの三つがあるとし、どれが最も強く働くかは場合によって異なるが、「読者の頭の中では、この三つは常に共存し同時進行であろう。＜攻め＞＜受け＞そして＜神＞、すべてが『私』＝読者なのである」と論じていた[溝口、2000 :

203]。アンケートでは、『受』と『攻』のどちらに感情移入するか」という質問をした。その問いに回答した11人中5人は「受が主人公である作品が多いから」「好きなキャラクターは受が多いから」などの理由で、「受」に感情移入すると答えていた。「攻」と回答したのは1人で、「攻が可愛くてしかたないから」という理由を挙げていた。残りの5人は、「ストーリーによる」「どちらともいえない。特にどちらかに感情移入して読んでいるわけでもなく、第三者的に外から見ているかも」「マンガによって。受け視点、攻め視点で感じ方が変わる」「場面による」などの回答があった。このことから、読者や物語の内容によって流動的であるが、永山や溝口が指摘するような読み方があることがわかる。

このアンケートの質問はセックスシーンに限定した問いではないが、この読みは、「攻」の顔が描かれるからこそ可能なのかもしれない。中野冬美は「男になって男を抱きたい」というファンタジーを満たすのは「やおい」だけである、と主張していた[中野、1994：136]。つまり、中野には、男である「攻」に感情移入し、男である「受」を抱きたいという欲望がある。そのような欲望を満たすのに「やおい」ほど適しているものはないだろう。男女の物語では、自らの性である「抱かれる」女性に否応なしに自己同一化せざるをえない。自らの性である女性の快楽は執拗に描かれるが、相手である男性の快楽はほとんど描かれない。「やおい」では、「攻」の快楽も描かれるため、抱く側の快楽も味わえるし、抱かれている側に感情移入しても「自分の身体で相手を感じている」という快楽も楽しむことができる。守如子は、「攻」の顔の役割として、『受け』が『攻め』的な快楽を引き出していることを示しているのではないだろうか」と指摘した[守、2007：80]。守によると、「受」は「自分が感じていること」を「攻」に見せつけるという働きかけをすることによって、「攻」の興奮という感情の「変化」を引き出しているという。そして、「受」はこの「攻」の興奮による「変化の様子」を感じ見ることによってさらに興奮を覚えている、と論じた。つまり、腐女子には、ファンタジーにおいて「自分が感じている」ことを示すことにより相手の快楽を見いだしたい、という欲望がある。そこで、「攻」の顔とはとても重要な意味をもっていたのだ。男性向けのエロマンガでは、「攻」の顔が描かれないため、「自分が感じている」ことを示すことによる「攻」の快楽の「変化の様子」が読み取れず、その欲望を満たすことができない。アダルトビデオもそうであろう。女性の快楽の変化のみで、男性の顔や身体はあまり映されないことから、男性の快楽の「変化の様子」を楽しむことができないのだ。しかし、「やおい」ではそれが可能であった。

アンケートでは、「やおい」のセックスシーンと比較して、「レディコミや少女漫画のセ

ックスシーンについてどう思うか」と「男性向けエロ漫画のセックスシーンについてどう思うか」という質問をした。そもそも「やおい」以外のジャンルのエロ要素は求めないのだろうか、「ほとんど読まない」と答える人が多かった。興味深い回答としては、レディコミや少女漫画のセックスシーンについて「自分が女だから恥ずかしい気持ちになる」[20歳、大学生、H]という回答があった。女性という自分の身体を通した快楽というものは、彼女にとって単純には受け入れがたいものなのだろうか。彼女にとっては、自らの性を排除した「やおい」のほうが、快楽を満たす上で居心地がよいのだろう。ちなみに、彼女は「女性らしくふるまうことに抵抗を感じたことはあるか」という質問に対しては「ない」と答えていた。彼女にとっては、ジェンダーの抑圧というものは自身の中では表面化していないようだ。しかし、「女性が性に興味を持つことは恥ずかしいこと」というジェンダーの規範が彼女の中に内面化されており、そのため、自らの性である女性の快楽が描かれることは、あまりにも直接的過ぎて、間接的に快楽を呼び起こす「やおい」を求めたのではないだろうか。他におもしろい回答としては、男性向けエロマンガは、「対象が自分の（女性）の身体だから読むほどのものでもない」[21歳、大学生、E]などあった。詳しく問うたら、「女の裸なんかより男の裸を見たい」と答えてくれた。他にも、他ジャンルのセックスシーンをあまり読まない理由として、「女性の性欲がリアルすぎるのがやだ。女の立場が低いのがやだ」[22歳、大学生、J]という回答があった。先ほどの例と同じように、「リアル」という言葉で表現し女性の性欲を認めつつも、女性が性欲を持つことについて否定的に見るジェンダーの規範が内面化されているのかもしれない。そして、「女性の立場の低さ」を否定的に見ているということからは、「やおい」であれば自らの性と遠のくため「立場の低さ」というジェンダーの抑圧について意識しなくてよくなるのだろう。

第三節 「愛」のあるセックス

そして、もうひとつ「やおい」のセックスシーンに特徴的なのは、とにかく「愛」のあるセックスだということだ。「やおい」は「純愛」を描く物語である。そのため、快楽だけを求めるような、いわゆる体だけの関係というものが否定され、なんらかのかたちで必ずと言っていいほど「愛」というものが表現されるのだ。「愛」を表現するためには、セックスだけでなく恋愛の過程を描かなければならない。「やおい」が、女性のためのエロマンガという側面があっても、読者はセックスだけでなく恋愛の過程を必要としている。なぜな

ら、第一章の第三節でもふれたが、「愛」のないセックスというものは、女性にとっては大きな恐怖となるからであろう。

それでは、第二章で紹介した星野リリィの『かわいがって下さい』[2003]では、セックスはどのように描かれているのだろうか。

星野の作品は、特に「愛」にあふれている。「受」と「攻」それぞれの「すごく好き」という気持ちが伝わってくる。その描き方は、まるで「愛のないセックス」や「肉体的快樂だけの関係」を完全に否定するかのような描き方だ。「セックスだけでなく恋愛の過程がみたい」と先述したが、セックスシーンをメインに描くような作品の場合、どうしても「恋愛の過程」を描くためにページを割けない。しかし、そのような場合であっても、セックスを描くにあたって、どうしても「体」だけでなく、「愛」があるという「証拠」を示さなければならない。そこで、星野が持ち出したのは、ファンタジー「すりこみ」という設定だった。「すりこみ」とは、「ネコのかいかた」によると、「ネコ」は初めて見た相手を好きになってしまう。だから、ご主人様以外の人は目かくしをとってはならないという。この設定によって、「ネコ」が初めて会った主人を全身全霊愛しすぎている状況が説明可能になる。恋愛の過程を描かず、「急に好き」になりしかもセックスをしてしまうという展開は、腐女子には受け入れ難いのだろう。【図11】そのため、星野は「急に好き」になる理由を、「ネコ」を飼うご主人様にも読者にも説明するために、この設定を取り入れたのだろう。また、「知り合って間もなく好きになる」ことや「愛」もなく「道具」のように扱うことは、否定されている。【図12】「ネコ」を性欲処理の道具としてしか扱わない主人がいることにもおわせているが、本編では決して描かれない。



【図11】星野リリィ
『かわいがって下さい』
2003、海王社、p.16-17

「すりこみ」について
説明されている

では、「すりこみ」の無いご主人様側の相手を好きと想う気持ち、「愛」はどのように描かれているのか。それが、それぞれの話のストーリーの醍醐味となっているともいえる。まず、サラリーマン風の男と少女のような「ネコ」の話では、「攻」は、「俺なしでは生きてゆけない」という「ネコ」に出会うことで、「ネコ」に惚れこんでいき、最終的に、今まで特定の相手を作らなかった攻が、「こいつでいいよ…」と永遠の相手を決めたかのように匂わせて終わる。【図13】また、攻が「ネコ」であるパターンでも、姉が勝手に買ってきてしまった「ネコ」を飼うことを嫌がっていた「受」が、物語全体を通して「ネコ」に惚れこんでいく様子が描かれる。「ネコ」は主人とセックスをしなければ1週間から10日で死んでしまうのに、怖がる「受」を思いやって攻は6日間セックスを強いることはせずに過ごすと、「受」が感情をむき出しにして誘ってくる、という展開になっている。【図14】



【図12】星野リリィ

『かわいがって下さい』

2003、海王社

p.60-61

道具のように扱うことは

否定される



【図13】星野リリィ

『かわいがって下さい』

2003、p.20-21

「俺こういう相手が

欲しかったんだ

俺なしじゃ生きて

いけないような…」

このように、「やおい」におけるセックスはとにかく「愛」が強調される。セックスは、快楽だけを目的とするのではなく、至高の「純愛」を表現するための手段である。「やおい」において、セックスは純愛と対立していない。セックスは純愛に入り込んでしまい、「純愛」を形成している。



【図14】星野リリィ
『かわいがって下さい』
2003、p.94-95

攻のネコは、
怯える受に対し、
セックスをすることを
思いとどまる

また、同じく第二章で取り上げた山田ユギの『誰にも愛されない』では、セックスはどう描かれているのか。

この作品の場合、セックスシーンよりストーリーに重点を置くため、セックスシーンに割くページは、60 ページ中 1~3 ページ程度だ。10 ページほどのショートストーリーの場合は 1 コマで匂わせる程度である。当然であるが、セックスの描写に重点を置くほどセックスシーンのページ数は多くなる。星野の「ネコ」の話の場合は、24 ページ中 12 ページほどがセックスシーンであった。性愛がメインではない作品であるといっても、セックスシーンを期待している読者は多いはずで、クライマックスにセックスシーンが描かれることが多い。

山田の作品で特徴的なのは、内面描写が多いということだ。通常の「ふきだし」ではない部分に、登場人物の心情を書き入れる「内面モノログ」の技法が使われている。この作品の場合、「受／攻」どちらかのキャラクターの一方の内面描写がされることが多い。【図15】【図16】それも、セックスにおける直接的な感想などではなく、そのセックスシーン前後のキャラクターの内面描写に一貫性があり、ストーリー全体の根幹になるようなこ

とが書かれていることが多い。日記のように、冷静に振り返るかのような内面描写の場合が多い。このような作品においてのセックスシーンには、性的な欲望を満たすだけのものではなく、読者よりが心理的に登場人物に感情移入し作品に没頭できるようにする役割を果たしているであろう。



【図15】

山田ユギ

『誰にも愛されない』

2007、リブレ出版、

p.48-49

飯島の内面モノローグ



【図16】

山田ユギ

『誰にも愛されない』

2007、リブレ出版、

p.214-215

日下の内面モノローグ

この「内面モノローグ」技法は、少女漫画や女性向けのマンガに多く用いられる技法であり、「ハードなBL」でもよく用いられるという[守、2007：79]。そして、「ハードなBL」の場合、「内面モノローグ」技法によって示されるのは、「受」の心情である場合が多いという。守によると、その役割は、行為においては受動的な「受」が、嫌がっているわけで

はなく、その行為を主体的に望んでいることが読者に明示される、ということだ。つまり、読者が抱く、望まないセックスなのではないか、という恐怖心を減らすためにも「内面モノログ」によって「受」の主体性を確保しておくのである。それだけ、女性にとって望まないセックス、「愛」のないセックスは恐怖なのであろう。なぜなら、「愛」は女にとって階級であった。「愛」の対象として選ばれないことは、女を恐怖に貶める。そして、彼女たちにとって、セックスは至高の「純愛」の表現なのだから。

第二節 パターン化されることへの問題

こうしたことから、読者の多くは愛情の先にセックスがあるのは自然なことだと考えているのと考えられる。ローティーンの女の子向けの少女漫画でも「過激な」性描写が描かれ始めたのは、「愛」のその先にあるセックスを描くことは自然と考え、だからこそ「リアル」だと思えて作品に没頭できるからではないだろうか。中高生に人気のケータイ小説も過激な性描写がされ、そこに読者は「純愛」を感じ「リアル」を感じている。仲の良い友人が、テレビ番組で映画コメンテーターが少女漫画『ハチミツとクローバー』[2000～]の実写映画の感想とし、「表現にセックスがないからリアルを感じない」という旨のコメントをしていたのを見て、「なぜ性表現がなければリアルではないのか」と嘆いていた。確かに、『ハチクロ』は、登場人物の間で肉体関係があったことを匂わせる表現はほとんどない。しかし、登場人物の内面描写がするどい感性で驚くほど丁寧に描かれており、「恋愛」よりも上級の「才能」や「絆」で結ばれる関係などが描かれる。その心理描写に、その友人はもちろん、それを好む読者は「リアル」を感じている。しかし、世の中は「リアル」さを感じるためには、セックスを必要としている風潮にある。

精神科医の香山リカは、こう指摘している。ローティーン向けの性描写が「過激な」少女漫画では、あくまでも恋人や先輩の男性に強く求められて性的な行動に応じているという。そして、「こんなに愛されている、こんなに必要とされている、という感覚を性的な関係でしか確認できないほど、少女たちは自分で自分を肯定しにくくなっているのかもしれない」と指摘した[香山、2007: 39]。関係性の中で、自分をとらえがちで、「愛される」「求められる」に象徴されるような他者からの評価を受け取るという形でしか、自己肯定感を得られないのだという。この分析には共感したが、これに比較した腐女子のとらえ方については、私は香山の考え方に違和感を覚えた。香山によると、腐女子たちは、『「他者との

関係の中でしか自己を確認できない』という関係性から解放されている」のだという[香山、2007：40]。物語から「私」を消すことで、それが可能になったのだという。この「私」を関係性の中から消してしまうことの問題について語っているが、そもそも、腐女子も関係性からは解放されていない、と私は考える。いくら自らの性をファンタジーから排除して第三者の視点で男性同士の恋愛を現実と距離を置いて客観的に楽しんでいるといっても、実際の作品は、自らが好む関係性を欲望し、時には作り出し、他者から「愛されている」「求められている」登場人物たちに自己投影して物語を楽しむ。一見、「私」は物語の中から消えているようでも、「私」は登場人物の中に生きていて、他者からの評価である「愛」を求めているのだ。こういった点では、香山が分析したローティーン向けの「過激な」少女漫画を好む少女たちと腐女子は変わりなく、「関係性の病」からは解放されていない。確かに、香山が指摘するように、「やおい」の登場人物と「私」の恋愛を妄想する人はいない。好きなジャニーズのあの人と「私」を妄想する女性は簡単に想像できるが、あの「やおい」の「攻」と「私」の恋愛を妄想する人はあまりいない。だから、「私」が消えていると言えるかもしれないが、この場合、「受」という「私」を代わりにおいて間接的に妄想するのだ。そもそも、マンガとはそういうものであろう。登場人物は「私」の分身であり、自己投影する対象である。香山は、『NANA』[1999～]を読む際に、「私が蓮（登場人物の男性）の彼氏だったら」というように、私と登場人物との関係を妄想し「私」が消えることはない、と述べていた[香山、2007：38]。確かに、そのような読みも存在するだろうが、物語に没頭する際には、登場人物のそれぞれに「私」を感じたり、または客観的に第三者の視点で恋愛模様を観察して楽しむであろう。「やおい」に限らず読者は、容姿や性格が自分に似ているキャラクターにしか感情移入できないわけではない。登場人物の内面描写がされるほど、そこに読者は「私」を見つけ、スポーツ万能な美形の男性にだって自己投影できるし、それが楽しいのである。

いずれにしても、腐女子も「関係性の病」からは解放されていない。他者からの「愛」という評価を求めている。腐女子も「私」を「愛して」欲しいのである。そして、物語の中で「純愛」とセックスを強固に結びつけた。「やおい」において、セックスは至高の「純愛」の表現だった。しかし、これは、香山が指摘するように、性的な関係でしか自己を確認できない状態でもある。「純愛」とセックスがパターン化されることは、女性をさらに苦しめてゆく。「純愛」とセックスが強く結び付けられてゆくほど、セックスがなければ「純愛」ではないのか、という不安ができてあがってゆく。現実の恋愛において、これは大きな

問題になってくるだろう。自分たちも「純愛」するためにはセックスをしなければならない、という規範が出来上がってしまい、セックスを求められないならば、私は「愛されて」いないのか、と悩んでしまう。セックスをしたくない私は、彼のことを本当は「愛して」いないのか、と思い込んでしまうかもしれない。これほど不幸なことはないだろう。「愛」の力は強烈だ。「愛」によって自分の価値が決まるのだから。

長年「やおい」を好んでいる友人がいる。彼女は、「やおい」のセックスシーンは好んで読むが、現実におけるセックスはできればしたくないと思っている。彼女は、最近できた恋人にそれを伝え、彼もそれに理解を示してくれたというのに、セックスできないなんて彼に対する「愛」が足りないのだろうか、と悩んでいた。「純愛」とセックスを結びつけるという、このひとつの価値のパターンだけが支配的になってしまうことには大きな問題があるであろう。

第四章 腐女子の中にあるホモフォビア

第一節 女性の「まなざし返し」は許されるのか

女性は、「やおい」においては、まなざされる客体ではなく、まなざす主体となり、自らの性的欲望を語る主体となる[金田、2007：177]。社会学者の吉本たいまつは、「BL によって、男性は自分たちが『まなざし返し』の対象となっていることを知り、逆説的に女性が強くまなざしに縛られていること、自分たちが女性たちを『まなざし』ていることを知るのだ。また BL を知ることは、女性の欲望のあり方を知ることへもつながる」と述べていた[吉本、2007：110]。女性がまなざす主体となれたという意義が「やおい」にはあるだろう。しかし、「やおい」において描かれるのは、男性同士の恋愛や性愛であり、いくらファンタジーといっても、その表現は現実のゲイとは無縁ではないであろう。まなざされる対象だった女性が、男性をまなざし返すようになったというが、その女性たちがまなざす対象がゲイであることに問題はないのであろうか。マンガ研究家のヤマダトモコは、「やおい」の描く「男と男の（恋愛）ファンタジー」には、「その表象を主に『他者』として扱われ消費されているゲイへの“ある種のイメージのおしつけ”があり、それは暴力的ともいえるのではないか、という問題がある」[ヤマダ、2007：87]と述べていた。この章では、その表象の暴力という問題に向き合いたい。

少女漫画に詳しい佐藤雅樹は、「やおい」についてこう批判していた。「かつて女たちを呪縛から解き放つ役割をなした表現物が、今では別の誰かを封じ込めるものに変貌している」[佐藤、1996：165]「別の誰か」とは、他でもないゲイのことだろう。佐藤は、ゲイの表象を女性が横奪してしまっていることを批判的にみており、「やおい」を立派な差別表現であるとしている。なぜならば、「やおい」の表現は、男性同性愛者の性を商品化しており、男性同性愛者を異性愛社会に隷属させるためのステレオタイプに押し込める表現であるからだ[佐藤、1996：166]。佐藤が言うように、問題は、表現にホモフォビアが隠されていることなのである。「やおい」というサブカルチャーの場合、二次創作などプロ・アマ関係なく、自分たち好みの作品を作り出し、具体的に作品にしなくても物語を妄想し語り合ったりする「遊び」がある。誰でもその「遊び」が可能なのだ。

そのため、差別的な表現に対する責任というものが軽くなっているのかもしれない。自分たちの「純愛」物語を作り出すために、腐女子は、ゲイを利用しているのだ。

そのことに腐女子は無自覚であるどころか、開き直りの姿勢も感じられる。

そもそも、「腐女子」という呼称はいったい何を意味しているのだろうか。この「腐女子」という言葉は、2000 年ごろから、「やおい」を好む女性の呼称として、女性自身が自嘲的に用いたと言われている。それまで、「やおい」というジャンルを愛する人たちを呼ぶカテゴリーが特になかったことからこの「腐女子」という呼称が広く用いられることになったのだろう。では、腐女子が自らを自嘲的に呼称する理由はなんであろうか。ひとつは、単にマンガといったオタク的なものを好むという点がある。この社会では、オタクである

ということは、あまり堂々と公言されない。ふたつめに、女性であるのに性的なものを好んで楽しんでいるという点。この社会では、女性は特に性的なものを欲望することはよくないという規範がある。そして、三つめに、これが「腐女子」と呼ぶ最大の理由かもしれないが、「反社会的」とされている同性愛の物語を好きでたまらない、という点だ。【図 1 7】の 2 コマ目では、「やおい」が大好きな 801 ちゃんは、「自分のしてることをキモイとか、反社会的とかわかって、でこういう部分を肯定されるとしにたくなるというか、殺せというか…」と言っている。801 ちゃんが「キモイ」とか「反社会的」と言っているのは、「やおい」を読んでいる自分なのではなく、「同性愛」の物語を読んでいる自分で、「キモくて反社会的」なのは同性愛という意識があるのではないだろうか。



カ』腐女子マンガ大系、p. 96

この腐女子の内面化されたホモフォビア、「イメージのおしつけ」という暴力という問題は、「やおい」を論じる上で欠かせない、欠かしてはならない問題であろう。「やおい」が、「実在するゲイ」とは独立の領域として認識されるようになったのは歴史的な経緯がある、と石田仁は述べる[石田、2007]。「やおい」はファンタジーであって、そこに描かれる男性

同士の恋愛は、現実のゲイとは別物である、と多くの腐女子は思っているのであろう。しかし、石田は、作品の中などで腐女子が使用する「ホモ」という言葉は、現実のゲイをつねに参照していることから、ファンタジーであるから現実とは無関係である、とする主張は誤っていると指摘する[石田、2007：115-116]。

今回、アンケートにおいて「現実のゲイに対してどう思うか」と「ゲイからの腐女子批判についてはどう思うか」という質問をしてみた。「現実のゲイに対してどう思うか」という質問に回答した12人中、ほぼ全員が「寛容」な回答をしていた。「恋愛は自由」などといった意見が多いが、やはり、自分とは直接関わりのない遠い存在である、といった雰囲気は文字面から伝わってくる気がした。例えば、「本人同士が好き合っているのだからいいのでは？親しい友人がゲイでも別に認められる。家族だと？かも」[45歳、主婦、C]という回答があった。同性愛を認めながらも、家族になると受け入れるための基準が高くなってしまふ。また、自分のイメージを押し付けるような回答もあった。「アリだと思います。少年・青年ならなお良し。マッチョはちょっと…」[21歳、大学生、J]「やおい」において描かれる男性は、美形だらけである。ヒゲや筋肉質のキャラクターも少ないながら描かれることはあるが、大半は美形のスマートな男性だ。欲望を描き出すマンガであるため当然かもしれないが、これを現実のゲイに押し付けることは暴力になるだろう。美形であるゲイは許されるのに、美形でないゲイは「ちょっと…」と拒絶されるのであれば、これは「イメージのおしつけ」という暴力以外の何でもないだろう。

次に、「ゲイからの腐女子批判についてはどう思うか」という質問はどうか。これは、思った以上に、その批判自体知らない人が多かった。「やおい」がどのように論じられているか、腐女子たちにはまだ届いていないようだった。石田が、「やおい／BLを批判的・分析的に言及するすべての『論』は、大好きな対象を汚辱にまみれさせる我慢ならない営みであり『やおい論は迷惑だ』ということになる」[石田、2007：118]と指摘したように、やはり「やおい」が公に論じられることには抵抗があるだろう。

回答にはこのようなものがあつた。「実際は（ファンタジーとは）違うと思うけど、あくまで妄想の世界だから個人の自由。男だって妄想するでしょ」[22歳、大学生、E]、「批判するのも自由。好きにやって下さいって感じ。あまり気にしたことない」[20歳、大学生、G]、「難しいですね。なんというか、住み分けして干渉しないのが一番だと思います」[21歳、大学生、M]、「人それぞれ感じ方は違うだろうから批判する人がいても別に構わない」[22歳、大学生、A]ここにあげたどの回答も、「勝手にしたら」というように開き

直ったような立場と、石田が指摘するような「ほっといてください」といった意味合いを感じ取れる。佐藤は、『『他人の領域』に土足で踏み込んでるんだよ。潔く謝るか、開き直るんだったら『差別者』の烙印を引き受けるぐらいの覚悟を持てほしいものだ』と痛烈に批判している[佐藤、1996：169]。腐女子には、今、差別表現について加害者であることを自覚し反省的になるべき時が来ているのだ。

第二節 「ゲイではない」という表明をめぐって

では、作品においてゲイはどのように扱われているか。「やおい」では、登場人物の男性キャラクターたちが、自分たち同性同士の恋愛について自分は「ゲイではない」と主張することが多い。「自分はゲイではないけれど、好きになったのがたまたま男のお前だったんだ」といったように、わざわざ表現されるのだ。つまり、異性愛男性を前提とした設定で、その上で同性である男を「好きになってしまった」という物語なのだ。これについて、溝口彰子は、「ゲイでない」と表明するということは、ファンタジーの中ですら、ゲイに自分を投影したくないという読者の意識を反映しているからである、と分析していた[溝口、2000：196-197]。「俺はゲイじゃない。君だけが好きなんだ」という決まり文句は、「男だから好きになる（本物の）ゲイは変態だ」という意味をおびることになる。そのため、「やおい」はホモフォビアに依存しつつさらにそれを再生産する、二重のホモフォビア装置なのだ」という[溝口、2000：196]。中島梓は、男同士という「障害」を乗り越える「純愛」のファンタジーだという[中島、1998：196]。「やおい」は、自分たちのファンタジーのために、同性愛を利用しているのだ。

藤本純子の分析によると、登場人物が異性愛男性を前提とした「ヘテロ」として描かれることは減ってきているという[藤本、2007：90-94]。分析対象がマンガではなく小説なのだが、参考になると思うので紹介する。藤本は、90年代前半と現在(2007)の作品を比較し、登場人物のセクシュアリティの設定を分析した。すると、登場人物の性的指向がどちらか一方でもゲイかバイとして明示される作品は、16%（7作品）から38%（25作品）と初期の2倍以上に増えているという。2002年の段階でも13%程度だったという結果をみると、藤本自身も指摘しているようにここ最近の傾向に過ぎないかもしれない。しかし、「やおい」も変化してきていることがわかる。

では、先ほどから例に出している星野リリィの作品では、どう描かれているだろうか。

『かわいがって下さい』[2003]では、男性同士で恋愛やセックスをすることに対して、それが「あたりまえ」であるかのようにストーリーが進む。星野の他の作品でも、そのような傾向はある。男同士であるということについて、全く記述がないわけでもないが、ゲイとしては描かない。基本はやはり異性愛を前提としており、「ただお前が好き」というお約束パターンだが、星野の場合それさえも無しにストーリーが展開することが多い。もしかすると、星野の独特なファンタジーな世界観が、それを許しているのかもしれない。

「ネコ」は「すりこみ」であるから、当然初めて見た人間を男でも女でも愛してしまう。では、主人はどうであろう。サラリーマン風の「攻」はヘテロであつたらしく、姉から「間違えてメスではなくオスを送ってしまった」という報告に対し、オスとかメスとか関係なく、「こいつでいいよ…」とまとめる。【図18】黒髪の「ネコ」のカップルの場合、「よりによってオスネコを当てるなんて…」というセリフだけで、家族も当人も男同士ということに特に何もふれない。【図19】攻が「ネコ」のパターンの場合、主人の「俺男だよ」という言葉に対して、「俺は別に男とかなんとかってのは気にしないけど?」「ご主人だけが好きだし」と返し、それ以外男同士であることについて、特に葛藤などはない。【図20】星野の作品は、異性愛を前提としているであろうに、自分が男を好きになるということに葛藤もなければ、男から愛されることに対しての嫌悪も特に表明されない。



【図18】星野リリイ
『かわいがって下さい』
2003、海王社
p.26-27



【図19】星野リリィ
『かわいがって下さい』
2003、海王社
p.56-57



【図20】星野リリィ
『かわいがって下さい』
2003、海王社
p.92-93

次に、山田ユギの『誰にも愛されない』[2007]では、第二章の第三節で詳しく説明したが、日下と上野というキャラクターがゲイと自認していた。ゲイをゲイとして描くのではなく、ヘテロをヘテロとして描くのではなく、ひとりの人間として描いており、それがこの作家の魅力とも言えるだろう。しかし、この作品でも、上野の「男とやるのにハマったのかよ」という問いかけに対し、長谷川は「…まあ、上野さん限定ですけど」と答えるシーンがあった。(p.21【図9】) この作品において、読者はゲイである日下や上野にも自己投影して読むだろう。先述したように溝口は、「ファンタジーの中ですら、ゲイに自分を投影したくないという読者の意識を反映している」と論じていたが、多くの作品で読者はゲ

イである登場人物にも自己投影して作品を楽しんでいるだろう。しかし、私は腐女子の中にホモフォビアがあることに関しては全く否定しない。この作品の場合はそこまで男性同士であることに嫌悪は表明されなかったが、なぜ、「やおい」において、ここまで「異性愛者だが、お前だから好き」という主張がまるで最上級の「愛」の表現であるかのように際立つのだろうか。

第三節 「女であるわたし」ではなく「わたし」を愛して

性別に関係なく、「お前だから好き」という表現には確かに「愛」を感じる。この表明は腐女子のどのような欲望を表わしているのか。確かに、「お前だから好き」の前置きに、わざわざ「自分はゲイではない」ということを表明するような言葉が、必ずといって良いほど付属するため、溝口らの「二重のホモフォビア」という解釈は妥当であろう。

しかし、作品によって読者は、ゲイである登場人物にも自己投影して物語を楽しむことがある。そこで、私は、この「お前だから好き」という言葉により重要性を感じる。腐女子は、「女であるわたし」ではなく、「わたし」を愛してもらいたいのではないだろうか。

「ゲイではないけれど、男のお前を好きになってしまった」という表現が、「やおい」において繰り返されるのは、腐女子のそのような欲望を表わしているのではないだろうか。異性愛間の物語において、「女が好きなのではなく、お前が好き」と表明されることは、あまりないだろう。一方で、「お前が一番好き」はよく見かける。『タッチ』[1981～86]では、達也は南に対して、「上杉達也は、浅倉南を世界で一番愛しています」と告白した。しかし、「一番好き」では、腐女子の欲望は満たされないのである。むしろ、その「愛」の告白は苦痛になってしまうかもしれない。なぜなら、『愛されること』は、女にとって階級[藤本、1999]であった。上杉達也の浅倉南へのその告白は、女性には「愛」による階級があることをまざまざと知らしめることになってしまう。腐女子は、「NO.1 よりもオンリーワン」の物語に魅かれるのだろう。浅倉南という「すばらしい女性」であったからこそ、「世界中のだれよりも」愛されたのだ。腐女子にとっては、まなざしにさらされ、階級闘争をすることは、苦痛でしかなかったのだ。そこからは快樂は生み出されない。また、そうした女性性をひきうけることから逃避したかった人にとっても、「女であるわたし」ではなく「わたし」への「愛」が表現される物語は、心地の良いものであったのだろう。

仮に、男女間において、「女が好きなのではなく、お前が好き」と表明されることがあつ

たとしても、「やおい」の描く同性間ほどその言葉に効力はないだろう。同性同士であるからこそ、その言葉が大きな意味を持つのだ。やはり腐女子の欲望する「愛」を描き出すためには、男性同士という関係性を用いなければならない。溝口が指摘するように、腐女子は、「恋愛をドラマチックにしたてるための小道具として同性愛を利用している」[溝口、2000：196]。また、「ファンタジーですから」という言葉で「同性愛」をファンタジーに押し込め、現実との距離を作り、そこから快楽を得ている。同性愛に対して「寛容さ」を見せつけても、自らの理想する「同性愛」のイメージから外れるものは受け付けない。批判を恐れ隠れて、「キモくてすみません」と逃げる。「キモい」のはいったい何か。その言葉には、「同性愛」が「キモい」ものであるという感情が隠れているのではないだろうか。

一方で、実際のゲイがどう扱われているかについても描く作家も出始めた。金田淳子は、漫画家アユヤマネとの対談で、同作家の『泣くのはおよしよ仔リスちゃん』[2006]のワンシーンを紹介し、表象の暴力の問題に向き合っている作品もある、と論じていた[金田、アユヤマネ、2007：165-166]。アユヤマネは、ゲイが認知されてきた最近でもTVなどでゲイの人が出てくると、周りの男性が「襲わないで～」など言ったりするのに対し、疑問を抱きこの作品を仕上げたという。【図21】アユヤマネは、親しい友人間においてもゲイに対する偏見が侵入しうるということを描いている[金田、2007：207]。絵柄を見てわかるように、一般的な「やおい」作品に比べると、一風変わった絵柄でありメジャーなものではないであろう。しかし、このような作品の登場には大きな意味があるだろう。「やおい」

の枠にとらわれず、マンガとしての可能性を広げた作品であると思う。



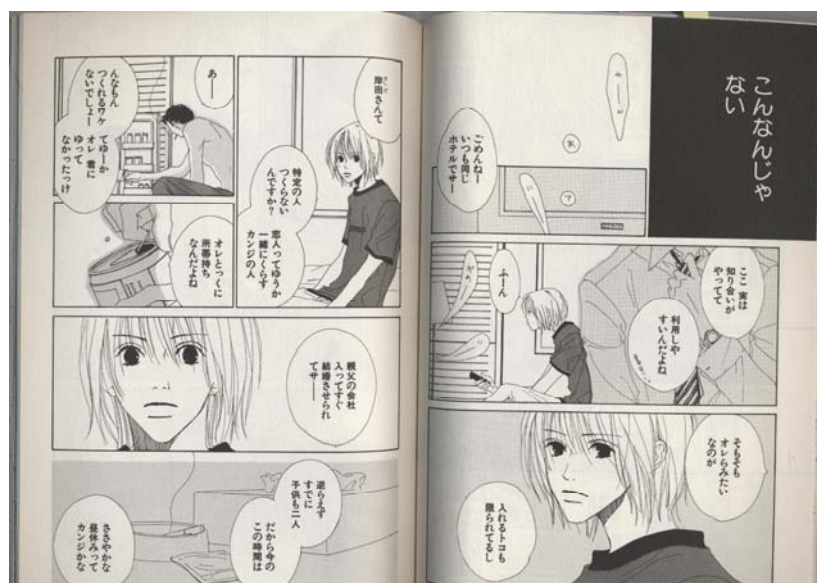
【図21】アユヤマネ

「タイニー颱風」p.42

『泣くのはおよしよ仔リスちゃん』

東京漫画社、2006

次に、やまがたさとみの『スリークオーター』[2001]のワンシーンを紹介する。主人公の山下は、昔から同性の友人ばかり好きになる。しかし、「男を好きな男」には惚れない。そんな山下の苦悩を描いたのがこの作品である。17歳の山下は、「男同士というワクに分けられても」自分を偽ったりするのは絶対にイヤで、「堂々と好きな人とあたりまえの恋愛がしたい」と思っている。しかし、現実とは違った。ネットのゲイサイトで知り合った岸田に会う今日も、「でもなんかちがう」「こんなんじゃない」と浮かない顔だ。ホテルに直行した岸田は、いつも同じホテルであることについて「オレらみたいのが入れるトコも限られてるし」という。男性同士のカップルでホテルを利用することが、世間の目にどのように晒されているかが痛く伝わってくる。そして、岸田の口から「普通に」結婚して子供もいることが知らされ、山下は「必死で勉強して大学には行って就職しても、あたりまえの生活が望めない僕らの、その先に待っているのが、こんなものしかないなんて」と絶望感でいっぱいになる。その後、岸田から「俺のことは気にしないで別の人探していいよ?」「悲観するな、がんばれ高校生!!」というメールが来て、山下は「考えこむな、上を向いて恋しよう」と前向きに歩むことを決意する。その後も山下は理想の恋愛ができなくて苦悩することになるのだが、そのようなエピソードがあった。【図22】【図23】「受」と「攻」のカップリングの恋愛模様という一般的な「やおい」的作品とは少し異なり、山下という一人の内面描写に焦点をあてた作品だ。この作品のように、実際のゲイがどう扱われているかについて、このように描く作品は他にあまり見かけない。



【図22】

やまがたさとみ

『スリークオーター』

2001、p.64-65



【図 2 3】

やまがたさとみ

『スリークオーター』

2001、p.66-67

溝口は、個々の「やおい」作品の分析をとおして、「現時点ではとても予測する勇氣はないが、きわめて異性愛規範主義的なものからクリアなものまで、女性のファンタジーのフルなスペクトルを現在進行形でみせてくれるやおい宇宙から、当分は目がはなせそうもない」と述べていた[溝口、2000：208]。今、何が「やおい」らしい作品なのか、と聞かれたら即答はできない。作品は多様化し、それぞれの「王道」が日々創り出されてゆく。しかし、腐女子は、表象の暴力という問題から逃げてはならない。私は、すべてがクリアな作品になるべきだと言っているのではない。ただ、自分たちが何から快楽を得ているのか、鈍感なままではいけない。「差別的なもの」から快楽を得ているとしたら、それが暴力であることを受け止めなければならない。「ファンタジーだからいいでしょ」や「ほっといてください」という態度に反省的になるべきだ。

終章 「受」と「攻」との関係性を超えて

ここまで、「やおい」を求める女性の欲望の背景に、何があるのかを探ってきた。まなざされることから逃避したいという欲求、現実の性と直接関係なく、ジェンダーによる権力関係のない恋愛への欲求、といったジェンダーの抑圧から逃れたくてたどりついたのが「やおい」だった。そして、「やおい」により女性は欲望の主体となれた。そこでは、「ジェンダーの娯楽化」という遊びにより、ジェンダー秩序を転覆させるという可能性も見えてきた。一方で、関係性の物語で「愛される」ことを求め「関係性の病」から逃れられないままでもいる。「純愛」とセックスを強固に結びつけパターン化することで、セックスによってしか「愛」を確認できなくなってしまう、自分の価値を見いだせなくなってしまう、という新たな危険な可能性も生まれてくる。「愛」という権力からは逃れられないのだ。

このように、「やおい」を論じることは、「やおい」を愉しむ「腐女子」は逸脱した存在で他の女性とは異なる本質をもつのではなく、すべての女性に共通する問題があること、社会の抱える問題があることを暴き出す。終章では、これらをふまえて、「やおい」のマンガとしての可能性について考えてゆきたい。

再び、「受／攻」というカップリングの遊びに注目したい。「やおい」では、「受／攻」のそれぞれに自由に男性性・女性性を持った要素を散りばめ、ジェンダー役割の境界線をあいまいにすることができる。たとえば、「誘い受」は、女性的な役割である「受」に、「セックスを主体的にリードする」という男性的な役割をあてはめ、新しい価値を生み出す。「ヘタレ攻」は、男性はリーダーシップを持って包容力があるべきという規範を覆すかのように、男性的な役割である「攻」なのに、情けなく頼りない。この「ジェンダーの娯楽化」に私も可能性を感じている。積極的にジェンダーの規範を「間違えて」、「受／攻」にあてはめることで、今あるジェンダーの秩序を「攪乱」させる可能性を持っているかもしれない。しかし、「受／攻」といった二項対立にしがみついたままでは、その可能性にも限界があるのではないだろうか。第二章の第四節でも少し触れたが、「受／攻」といった二項対立に、「女性性／男性性」という二項対立によって分類されたジェンダー要素を振り分けて鎖のようにつないでいるだけで、決してグラデーションではないのだ。

「受／攻」は、「やおい」を構成する上で、最重要な要素であるということは承知の上で、その関係性の基礎を捨て、「受」と「攻」との関係性を超えることこそ、「やおい」のマン

ガとしての可能性を広げることになる、と言おう。すでにそういった作品も見られるし、それはもう「やおい」と呼ばないのかもしれないが。

実際のひとりの人間というものは、いろんな要素を持ってももちろんいろんな役割を抱えているだろう。それを「受／攻」にふりわけ、人間を種類分けしてゆくことに何の意味があるのか。なぜか初対面の席など、占いに過ぎないこの血液型性格診断に基づき、「血液型あてゲーム」などのようなものが始まり、同席する人間が4つの種類に分けられてゆく。さらにひどいのが「S／M」だ。なぜか飲み会の席などで、人間を「サド」と「マゾ」の二つに分けてゆく。しかも、この言葉は、もはや性的なものに直接関わらない性格判断のようなノリで使われている。これ自体は、コミュニケーションのひとつとしてその場を盛り上げる意味があるかもしれないため、否定はしない。しかし、これらに代表されるような人間の種類分けは不気味だ。「リアル」に生きる人間を、記号で説明しているのだ。「やおい」に限らず、オタク文化は記号の消費である。男性向けエロマンガに詳しい永山薫は、ロリコン漫画に描かれるキャラクターは、「記号の集合体」であり読者は「データに萌える」のだという[永山、2006：92]。多くの「やおい」的な作品も、そのような側面があるだろう。「キャラ設定萌え」といって、キャラの特徴を表す設定さえあれば萌えることが可能である人もいる。たとえば、ヘタレ、眼鏡、オレ様、医者、先輩、年下など、がある。カップリングであれば、「生徒会長×不良」といったように表記したりする。しかし、これはあるキャラクターの一つの要素を抜き出し、それを記号化して、さらにはカップリングするという行為である。この遊び自体は否定しないが、ひとりの人間というものは、実際はそのような記号で示すことができないくらい複雑なものであろう。

あなたはどんな人間ですか、と聞かれて即答できるほどひとりの人間のパーソナリティは単純なものではない。マンガもそうであるほうが、深みが出ておもしろいと思うのだ。

「受／攻」などに分けなくて読まなくても、十分楽しめる「やおい」はもう登場している。しかし、アニメや漫画のパロディである二次創作の狭義の「やおい」においては、この「受／攻」という概念を捨てることは難しいかもしれない。永久保が、「やおい」を「ジェンダーの娯楽化」と示したように、二次創作の「やおい」においては、カップリングしジェンダー要素を「受／攻」にふりわけてゆくことが遊びであり、快楽であり、二次創作の醍醐味になっているだろう。既存のアニメや漫画などのお気に入りのキャラクターを「受／攻」に分けて物語を創作するのだ。しかし、分類やステレオタイプによる単純化は、人間をさらに「生きづらく」させるだろう。「やおい」においては、男性キャラクターという「他者」

を分類するのだから、その分類という単純化による「生きづらさ」から鈍感になってしまふ。「やおい」が、腐女子にとって自らの「生きづらさ」を開放する「ジェンダーの娯楽化」という遊びになっているのは、自らを物語から消し、「他者」を分類し演じさせているからなのだ。

「受／攻」という分類のカテゴリーが、「やおい」にとって重要な解釈のコードであることは認める。その解釈のコードが可能にした「ジェンダーの娯楽化」という娯楽の遊びにも期待はしているが、一方で、同時に過大評価してはならないと思っている。「受／攻」に既存の男女関係をふりわけ誇張して大量に生み出すことで、本当に「攪乱」が可能になるのか、という疑問が残る。「やおい」には、女性の欲望を満たし、女性固有の娯楽を見出すことができる、という機能がある。しかし、既存のジェンダーの規範を「攪乱」させるような機能を本当に「やおい」が持っているのだろうか。真に、「やおい」がその役割をはたすためには、「受／攻」という分類のカテゴリーを超え、マンガとしての可能性を広げることが必要なのではないか、と私は考える。プロ・アマ問わず多くの作家や読者は、自身の欲望を満たす娯楽としての無意識にたどりついたのが「やおい」であっただけで、「やおい」を描き消費することで積極的に「ジェンダーを攪乱させよう」と思っている人など、ほとんどいないであろう。しかし、個々の作品には、この社会におけるジェンダーの規範やセクシュアルマイノリティの扱われ方について、疑問をなげかけるようなものも見られる。そのような作品に出会うと、私は「やおい」のマンガというメディアとしての可能性を感じるのだ。今後も「やおい」から目が離せない。

あとがき

この論文をとおして、「やおい」を求める女性の欲望について探ってきた。そして、その欲望を明らかにすることで、腐女子に限定された問題ではなく、女性一般に共通する問題があること、社会の抱える問題があることが分かった。しかし、実際に作品分析にあたれた作品は少なく、反省点も残る。「やおい」と恋愛至上主義や異性愛秩序という社会との関係を論じようと試みたが、まだ不十分であったと思う。アンケートやインタビューも行ったが、協力者に偏りがあったことや、発言の真意に深く迫れなかった点が残念だった。「やおい」の表象の暴力という問題についての考察も、十分に論じきれなかった。「やおい」において描かれる「男性同士の恋愛」が、「実在するゲイ」とは独立の領域として認識されるようになったのは歴史的な経緯がある、と石田仁は述べていた[石田、2007]。また、作品の内容にも時代によって変化が見られることは、永久保陽子や藤本純子、溝口彰子らの詳細な作品分析により明らかであった。このようなことから、腐女子の世代間的な変化というものがあることは窺えたが、具体的に世代間でどのような相違があるかは十分にあたれなかった。作品の内容からそれを見出すことは可能であり、実際に行っている研究者も先にあげたように数多くいるが、やはり、作品の分析だけでは個々の腐女子の声は聞こえてこない。やはり、実際にいろんな世代の腐女子との対話というものが、もっと必要であったと思う。

また、商業誌などの「BL」と呼ばれるオリジナル作品である「やおい」と、既存のアニメや漫画などのパロディとして描かれる二次創作の「やおい」には、もちろん共通する欲望は見られる。しかし、「BL」と呼ばれる「やおい」は、初めから腐女子に向けて「男性同士のファンタジー」を提供する作品であるのに対し、二次創作である「やおい」は、一般向け、男性向けに描かれる作品を「読み換える」遊びである。この二つの「やおい」には、それぞれ特徴的な欲望も見出せると思ったが、具体的には論じきれなかった。

反省点は多く課題は残ったが、この論文を書いたことは私の人生で大きな意味を持つことになると思う。「やおい」を求める女性の欲望を探ってゆくことで、その背景にある問題についても焦点をあてることができた。つたない文章で、考察もあまい論文だけれど、少しでも多くの腐女子に読んでもらいたいと思って書いた。この論文を書くにあたって読んだ様々な「やおい論」と、アンケートやインタビューで出会った腐女子の間には、まだまだ大きな溝があるように感じたからだ。多くの腐女子にとって、私のこの論文はリアリテ

いの感じられないものかもしれないが、個々の「生きづらさ」や快樂の理由について少しでも共感し、自己を内省的に見つめ直すきっかけになったら嬉しい。また、「やおい」に全く馴染みのない人にとっても、興味のそそる内容になっていたら幸いだ。

最後に、この論文を書くにあたってお世話になった方々にお礼を述べたい。まず、ゼミナールを通しての議論で、得たものは大きい。毎回のゼミの議論やたわいない会話からも、ゼミのメンバーからのアドバイスはかなり参考になった。小さな相談にも乗ってくれて、本当にありがとう。私はゼミを通して、かけがえのない大切な仲間を手に入れたと思っている。そして、親友の田造いずみさん。時間も忘れて大好きな社会学を語り合って過ごした日々は、本当に楽しかった。私の些細な疑問にも、真剣に考えてくれて本当にありがとう。セックスと「純愛」の結びつきについては、するどい指摘をしてくれて感謝している。忙しい中アンケートやインタビューに協力してくれた方々にも、お礼申し上げたい。

そして、明治学院大学の諸先生方。どの講義も、新たな視点を得るものばかりで、毎日が楽しかった。特に、社会学特講で、セクシュアルマイノリティや「やおい」について講義してくださった石田仁先生。楽しくて2年間も授業を受けてしまった。毎回の講義で、様々な論点を与えてくださり、この論文を書くにあたって大変参考になった。本当にありがとうございました。社会学史の小宮友根先生の授業もおもしろく、偉大な社会学者たちがどのように「社会」を捉えていたかを学んでゆく中で、自分は「やおい」について研究しているとき、どのように「社会」を捉えているかについて考えるきっかけになった。他にも、専門科目でない地理学や化学などといった授業をとおして得た視点や思考も私の人生にとって重要な糧になると思う。

そして、この論文作成にあたって個別指導を担当してくださった加藤秀一先生。先生と過ごした日々は、私の漠然としていた「生きづらさ」を言語化する日々であった。今まで見えていなかった「社会」が見えてくることで、絶望的でつらくなることもあったが、何がどうつらいのかを言語化でき考察できるようになっただけでも、大分解放された気分になれ強くなったと思う。ゼミや個別指導では、先生の質問に答えることで自らの疑問がどんどん明らかになっていき驚いた。親身になって相談に乗ってくれて、本当にありがとうございます。演習1や専門書購読では、読解力をかなり鍛えられた。特に、専門書購読で読んだセジウィックの『クローゼットの認識論』は、まるで聖書のように偶然開いたページがタイムリーにこの論文で疑問に思っていたことにリンクしていることが多く、毎週授業を楽しみにしていた。演習1、2の読書レポートでも、読解力と文章力を鍛えられた。

この2年間は、今までの人生で一番たくさん本を読んだ。それまであまりに本を読んでこなかったということもあるが。毎月3冊の新書などの批評文を書くことはなかなか大変だったけれど、鍛えられたし何よりも楽しかったので、新書批評を新たな趣味にしたい。とにかく、充実した大学生活を送れたのも加藤先生のおかげだと思っている。先生のもとで、卒業論文を書けたことを誇りに思う。これから社会に出て、つらいことがあってもこの4年間で学んだことを心の糧に、強く明るく私らしく生きてゆきたい。

私を支えてくれたすべての人に心から感謝したい。最後まで、読んでくださりありがとうございました。

2009年1月8日

田中 望

参考文献

<引用文献>

- 石田仁 2007「ゲイに共感する女性たち」『ユリイカ臨時増刊 腐女子マンガ大系』青土社
- 石田仁 2007「『ほっといてください』という表明をめぐって」『ユリイカ臨時増刊号 B Lスタディーズ』青土社
- 上野千鶴子 1998『発情装置 エロスのシナリオ』筑摩書房
- 笠間千浪 2001「<解釈共同体>としての「やおい」サブカルチャー」竹中恵美子・三宅義子監修『第三巻 日本社会とジェンダー』明石書店
- 加藤秀一 1996「女という迷路—性・身体・母性のスクランブル」『性現象論 差異とセクシャリティの社会学』劉草書房
- 加藤秀一 石田仁 海老原暁子 2005『図解雑学ジェンダー』ナツメ社
- 金田淳子 2007「やおい論、あしたのためにその2。」『ユリイカ臨時増刊号 B Lスタディーズ』青土社
- 金田淳子「やおい論の批判的検討/やおい論、明日のためにその1」東浩紀編メールマガジン『波状言論』2004.12.30 配信
- 金田淳子 2007「マンガ同人誌 解釈共同体のポリティクス」佐藤健二・吉見俊哉編著『文化の社会学』有斐閣
- 金田淳子「マンガ同人誌」佐藤健二・吉見俊哉編著『文化の社会学』2007 有斐閣
- 金田淳子 2006「ヤオイ・イズ・アライブ わかりたいあなたのためのやおいマンガ・マップ」『ユリイカ』2006、1月号、青土社
- 金田淳子・三浦しをん 2007「『攻め×受け』のめくるめく世界」ユリイカ臨時増刊 腐女子マンガ大系』青土社
- 金田淳子・アユヤマネ 2007「すべてが“絵になる”マンガを求めて」『ユリイカ臨時増刊号 B Lスタディーズ』青土社
- 香山リカ 2007「腐女子の自我は煙と消えた」『ユリイカ臨時増刊 腐女子マンガ大系』青土社
- 佐藤雅樹「少女マンガとホモフォビア」『クィア・スタディーズ』1996.7 七つ森書館
- 永久保陽子 2005『やおい小説論 女性のためのエロス表現』専修大学出版

- 中島梓 1991『コミュニケーション不全症候群』筑摩書房
- 中野冬美「やおい表現と差別—女のためのポルノグラフィーをときほぐす」『女性ライフサイクル研究』4号.ISSN=0917-5660
- 永山薫 2006『エロマンガ・スタディーズ』イーストプレス
- 藤本純子 2007「関係性からみるBLの現在」『ユリイカ臨時増刊号 BLスタディーズ』青土社
- 藤本由香里 1992『快樂電流 女の、欲望の、かたち』河出書房
- 藤本由香里 2007「少年愛／やおい・BL」『ユリイカ臨時増刊号 BLスタディーズ』青土社
- 溝口彰子「ホモフォビックなホモ、愛ゆえのレイプ、そしてクィアなレズビアン—最近のやおいテキストを分析する」『Queer Japan 2号』2000.4 劉草書房
- 守如子 2007「ハードなBLの可能性」『ユリイカ臨時増刊 腐女子マンガ大系』青土社
- ヤマダトモコ「プレ「やおい・BL」という視点から「お花畑」を準備した作家たち」『ユリイカ臨時増刊 腐女子マンガ大系』青土社
- ヤマダトモコ 2007「ボーイズラブとのなかなおり」『ユリイカ臨時増刊号 BLスタディーズ』青土社
- 横里隆編集 2007「ヘタレ攻め？誘い受け？？魅惑の・ボーイズラブ特集」『ダ・ヴィンチ』11月号
- 吉本たいまつ 2007「男もすなるボーイズラブ」『ユリイカ臨時増刊 腐女子マンガ大系』青土社
- 吉本たいまつ 2007「『オタク喪男』とボーイズラブ」『ユリイカ臨時増刊号 BLスタディーズ』青土社
- 渡辺由美子 2007「青少年マンガからみる「やおい」」『ユリイカ臨時増刊 腐女子マンガ大系』青土社

<参考文献>

- イブ・コゾフスキー セジウィック著、外岡尚美訳 1999『クローゼットの認識論—セクシュアリティの20世紀』青土社
- 岩井阿礼「性表現の主体としての女性—女性向け男性同性愛ファンタジーに見られる性役割葛藤と性役割多元化の試み」『Sociology Today』6号 1995 お茶の水

社会学研究会

- 上野千鶴子 2007「腐女子とはだれか？サブカルチャー分析のための覚え書き」『ユリイカ臨時増刊 腐女子マンガ大系』青土社
- 川原和子 2007「やおい心をくすぐるもの」『ユリイカ臨時増刊 腐女子マンガ大系』青土社
- 杉浦由美子 2007『オタク女子研究 腐女子思想体系』原書房
- ながくぼようこ 2007「女性たちの“腐った夢”＝＜やおい＞小説」『ユリイカ臨時増刊 腐女子マンガ大系』青土社
- ながくぼようこ 2007「『学園もの』よ永遠なれ…」『ユリイカ臨時増刊号 BL スタディーズ』青土社
- 藤本由香里 1998『私の居場所はどこにあるの？』学陽書房
- 溝口彰子 2007「腐女子のポテンシャル」『ユリイカ臨時増刊 腐女子マンガ大系』青土社